

証の雅集

No. 433

Pensoj flugas trans la land - limon
THE SENRYU ZASSHI



麻生路郎☆主宰

六月号

川柳雑誌社主催

7月は川柳祭

(下段広告参照)

出席者も投句者も特に
切りにご注意下さい

本社六月句会

はつ夏はよろしきかな
いざ句箋を手にしませう。

日時 六月十日(月) 午後六時

会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題 「待機」(二句) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半切り)

「口絵」(三句) 中島生々庵選

「寝返り」(三句) 黒川紫香選

「面接」(三句) 吉田圭井堂選

三題(当日発表)

若本多久志

柳話 呈賞 費百円

☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

幹事 紫香・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・

与呂志・清人・水洞・すゝむ・薫風子・柳

宏子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切五月八日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪(671)六〇八一



川柳

川柳まつり

特別課題

「先見」

(2句)

麻生路郎選

(切・六月末日本社着便句)
(袋裏面に支部名雅号明記)

日時 7月7日(日) 午後一時

会場 北極星

大阪市南区難波新地四番丁四
(地下鉄ナンバ駅北東出口東
スグ) 電話六四二一七五

代表

司会 西尾 栞
開会の辞 川村好郎
挨拶 中島生々庵

柳話 大阪城の話(大坂城天守閣を岡本良一氏
講演 「本心」(三句) 若本多久志選
兼題 「円満」(三句) 松江梅里選
「風変わり」(三句) 清水白柳選
「星」(三句) 正本水客選

出席者も兼題全部・各題句箋別紙・裏面に
雅号明記六月末日本社着便のこと

席題 当日 三題発表(各題三句)

★特別課題「先見」発表 麻生路郎選

呈賞 ☆各題天位人・各題天位から路郎選によ
り不朽洞賞

余興 有志 諸家

閉会の辞 吉田圭井堂

会費 百五十円(参加者全部におみやげ進呈)

懇親宴 会費六百五十円(同会場において5時半
から7時までの予定)

★投句だけの方は郵券五十円同封(切

6月末日)

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

俺だ俺だよと銅像云いたそう

地球が一回転した間の汚職

そんな大臣がいたかネと云われ

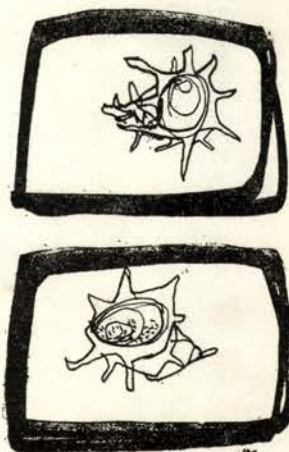
誘拐のお役にたった電話帳

ピストルの魅力カウンターに突ツ立ちあがる

藤吉郎も少年Aの頃ありし

睡眠剤飲むなと云うた老教師飲む

眼が潰れるまでにと書き遺した本か



川柳雑誌六月号目次

不朽洞句帖

(三)

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘
麻生路郎 (3)

川端柳風・高須曜三味・前田喜代人

柘植金治・清博・藤井和雄
丸十府・岡田甫 (12)

「有情」の三つの潮流

河野春三 (17)

名句と難句

麻生路郎 (4)

芸術は長し

八木摩天郎 (20)

からくり祝い膳

東野大八 (15)

曲解

長野文庫 (16)

リレー句評

宵明・文庫 (25)

窓口談義

麻生路郎 (34)

飛燕往来

大同小異 (40)

大雨の思い出

阿茶・味平・薫風子・静馬 (28)

★街で拾う

与呂志・ささ子・雄々 (39)

★街で拾う

主井堂 (36)

★街で拾う

光郎氏の巻 (33)

★街で拾う

富士野鞍馬 (32)

★街で拾う

奥津啓一郎 (40)

★街で拾う

麻生路郎 (6)

★街で拾う

諸生路郎 (11)

★街で拾う

北川春郎 (20)

★街で拾う

麻生路郎 (24)

★街で拾う

麻生路郎 (41)

★街で拾う

若本多久志 (39)

★街で拾う

永松東岸 (36)

★街で拾う

石倉旅風 (37)

★

★不朽洞会から

「赤字」

「口先」

「内職」

(46)

★柳欄室



川柳 名句と難句

麻生路郎

する画家の目は、肌をなめるどころか、骨の髄までも、しゃぶって飽きないのである。目で肌をなめるのであるから対照はモデルに限らないことは、いうまでもなからう。感覚的な掴み方のめずらしい作品である。

〔五〇八〕

バタ屋の親父もベレー帽をかぶってた

(夢貳)

こんな句を見たら、バタ屋の親父はフンガイせずにはおかまいだらう。

「なんでバタ屋のワタシが、かぶってはいけないのですか」

と作者が吊るし上げを食わなければ幸いである。バタ屋の親父にも近ごろハヤリの憲法の自由を振り廻す権利があるからだ。

ベレー帽というのは大黒帽に似た頂点につまみのある縁なし帽で、主にスペインやフランスで常用されているが、バスクの男子が用いたのが最初だろう。バスクというのは仏・西国境の西部ピレネー山脈地方に住む非インド・ヨーロッパ人系の種族だそう。

わが国でも、婦人や子どもが、被っているが、男子では画家や芸術家などが被り始めてから広く愛用されるようになった。作者の眼には画家などが被っている印象が深く烙きつけられているのでバタ屋が冠ぶ

〔五〇三〕

飲めぬのでせのない婿やなと思ひ

(没食子)

スマートだし、東大出だし、お家柄だし、毛並みのいい点においては申し分のない婿だが、一滴もいけぬ口には嫁のオヤジたるものガツカリしたのである。気抜けしたオヤジの顔が見えるようだ。愛飲家の心理を巧みにつかんでいる。

「せのない」は大阪の方言で、情けない、つまらない、甲斐がないという意だ。発音は「せエ」(糖)のないというように、「せ」を少しく引くつと大阪弁の気分が出る。

〔五〇四〕

背のチャック黙って向ける人が出

来

(孝正)

新婚ホヤホヤのうれしさがにじみ出ている句だ。「黙って向ける」の用語がこの句を生かしている。

チャックはジッパーともフッスナーともいうて、留め金的一种である。ジャンパーの前明きや、スカートの横明きなどの打合せに、ボタンの代りに縫いつける開閉器であるが、上掲の句の場合は背にチャックを用いているので、人手を借りるのだ。

〔五〇五〕

晴耕によく慣れた爪の土

(向水)

停年退職をした人と見てもいい。

雨読とまではゆかぬが、晴耕によく慣れた。そして爪の間に黒い土が狭まっっているのを発見しての感懐である。ようやく慣れたものの、いつまで晴耕に甘んじていられるものか。思えば不安なしとはいえないというのであろう。

〔五〇六〕

おたやんは大阪弁で喋りそう

(蕉風子)

おたやんの福徳田満な顔をじっと眺めて

いると、「おいでやす」とか、「へエ大きに」とか、大阪弁で喋りそうに思える。

詠んだのである。たしかにおたやんからはそうしたムードが生れて来そうに思える。作者はそうした感覚でおたやんをキャッチしたのである。

大阪方言事典によると、オタヤンはお多福の、下の半分を略して、それにヤン(さん)を附けたもの。又、夏祭の囃子唄に「おたやんこけても鼻打たん、云々。」と解説されている。おたやんはお多福の愛称でもあるが、顔が円くて、額が高く、両頬がふくらんで、鼻が低い女の顔なので、女を罵るという語にも使われている。しかし、この句の場合はおたやんに親しみをもっているの、罵る意味はない。

〔五〇七〕

画家の目に肌をなめられたと知らず

(生薑)

どこまでも真を美を深く鋭く描こうと

する画家の目は、肌をなめるどころか、骨の髄までも、しゃぶって飽きないのである。

目で肌をなめるのであるから対照はモデルに限らないことは、いうまでもなからう。感覚的な掴み方のめずらしい作品である。

〔五〇八〕

バタ屋の親父もベレー帽をかぶってた

(夢貳)

こんな句を見たら、バタ屋の親父はフンガイせずにはおかまいだらう。

「なんでバタ屋のワタシが、かぶってはいけないのですか」

と作者が吊るし上げを食わなければ幸いである。バタ屋の親父にも近ごろハヤリの憲法の自由を振り廻す権利があるからだ。

ベレー帽というのは大黒帽に似た頂点につまみのある縁なし帽で、主にスペインやフランスで常用されているが、バスクの男子が用いたのが最初だろう。バスクというのは仏・西国境の西部ピレネー山脈地方に住む非インド・ヨーロッパ人系の種族だそう。

わが国でも、婦人や子どもが、被っているが、男子では画家や芸術家などが被り始めてから広く愛用されるようになった。作者の眼には画家などが被っている印象が深く烙きつけられているのでバタ屋が冠ぶ

っているのを見て特に興味を持ったのである。

〔五〇九〕

表彰を受けて世間を狭く生き

(桂仙)

何んの表彰だか判らないが、マスコミな

どから、褒に持ちあげられると、本人は今後おかしなことをしてかして世間の物笑いになりたくない、世間の眼をムヤミに怖れるようになるものらしい。そこをつかんだ穿ちの句だ。曾て、日本画家の菅橋彦氏が大坂市の名誉市民にまつりあげられた時に大阪芸文協会で祝賀の集りがあった。その時の挨拶の言葉の中に、「これからは夜遅く屋台へ首を突っ込むわけにもいきません」と述べて苦笑されたが、庶民的な氏ですら、そうした考えが真ッ先にアタマに浮ぶのであるから、そうでない人たちが表彰されたら、妙に固くなって、この句のように世間を狭く生きるのではあるまいか。

〔五一〇〕

不合格なくさめる言葉用意する

(むじな)

入試の不合格か、就職の不合格かは判らないが、周辺にはそのどちらの不合格もあるだろう。

「なあに、一度や二度すべったところで、また来年受ければいいじゃないか」と相手によって、いろいろと慰める言葉を用意するというのである。それはど今の社会は入試

にすべり、就職のテストに失敗するのである。慰める側の人たちもなみたいていではない。悲観して鉄路の錆となったり、精神病院の厄介になつたりされては大変だからである。慰める側の心理の動きを卒直にとらえた句だ。

〔五一一〕

文学の名の性描写きたならし

(八九す)

谷崎潤一郎の「鍵」や「風韻老人」の日記のような小説を指して、この句が生れたのか、どうかは知らないが、文学の名の性描写が汚らしいか、汚ならしくないかは主観の問題であつて、この句の作者の観方が全然間違っているとは云えないところに、この句の存在があるわけだ。しかし句として味の深さが足りないと思う。

〔五一二〕

羽根ぶとん立志傳では板に寝て

(王石)

軽うて温たかいので、従来羽根ぶとんは贅沢なものとされてきた。今ではその羽根ぶとんに埋まるように寝ている彼も、曾ては貧困の中に育ち、粒々辛苦して今日の富をきずき、いわゆる立志伝中の人となつたのであつた。「立志伝では板に寝て」が彼の過去の生活のすべてを物語っていると云

つていいだろう。面白い句だ。

私の亡き父が明治時代に朝鮮から仔虎を贈呈したいと言われた時、虎を貰つても飼うわけにいかないと、ことわつたと

ころ、それではというので大きな鶴を贈られた。この鶴の羽根で、父は羽根ぶとんを作つた。当時としては贅沢そのものであつた。しかし、父は立志伝中の人とはならなかつた。私はその余りの羽根で小さな坐布団を作つてもらひ、教室の椅子にくくりつけたことを今でも忘れることが出来な

〔五一一三〕

若旦那のうちに祇園を卒業し

(可住)

以前は地方の若旦那族で京大に入学、卒業は放つたらかして祇園の方を優秀な成績で卒業したという結構なご身分の若旦那も相当にあつたらしいが、今では裕福な家の御曹子でも、大学への進学の苦難は相当のもので、世間の手前でもアルバイトと称して、多少の小遣い稼ぎはしなければならぬ、祇園の入口ぐらひはのぞいても、卒業生となると幾らでもないであろう。殊に今の学生では若旦那の呼称にふさわしい若者はもう稀にしか存在して

いないのではあるまいか。

とすればこの句は一時代前の学生を詠んだ穿ち句といふことが出来よう。

〔五一一四〕

ふんどしは嫌とも言

わず洗濯機

(多八志)

そんな汚ないものの洗濯はご免だとも、割り増しを呉れなきゃ嫌だとも言わな

いで、命ぜられるままに、黙々と使命を果しているところに、社会諷刺があるようだ。擬人法の構成で、ふんどしという用語にも汚ならしさが感じられないで、むしろ多少のユーモラス感さえ伴っているのは作者の手腕であらう。

〔五一一五〕

市長さん新生喫うてはる人気

(正太郎)

市長の一挙手一投足が対外的に及ぼす影響の大きいことを思うと、一般市民から選挙される市長たるもの、うっかりしてはいられない。

「市長さんが新生を喫うてはるのに、われわれが富士やビールを喫うわけにはいかんやないか。今に市政はウンと立ち直るよ」と大変な人気だといふのである。市民の眼は大雑把なようでも案外細かいところまで見道がさない。この句の場合、こんなささいなことにも市長に対する親しみが湧いているのがいい証拠だ。



ビールは
アサヒ

川柳塔

大阪市 市場 没食子

娘嫁ぐ

二階三階親だけになりガランとし

ピンチの裏にチャンス来らず老いたのみ

統一選挙

党問わずみな新顔と願いたし

西宮市 若本 多久志

気も軽く口語体にして借用証

クラスメート訪えば秘書課で待たされる

贈与税払うてやって子に渡し

大阪府 川村 好郎

姪娘を養子とりわけ嬉しがり

宝くじ買ってる肩を叩きかね

負けん気をかくし養子の低姿勢

正直に老けたといわれ腹が立ち

命さえ与えられしと悟る日よ

素直なる水の流れをまだ見つめ

大阪市 正本 水客

今日で停年やと笑える日

畳替えしよかと妻も気をかえる

長女結婚三回

式場で写真パチパチ気が和み

新婦には喋ることなき小半日

娘をとられたとも子供がふえたとも思う

高槻市 丸尾 潮花

名取りして食えずやとなとして踊り

海くろく暮れて皆生の夜は静か

忘れ去ることとは月に立つことか

大阪府 西い わを

極端に云えばキッスの線を越し

役員にされたは年令のせいだろう

大阪市 北川 春葉

アカハタは電車に見えるように立て

市長選の期間ゴミ取りよう来よる

いつ寤になるかも知れぬので遊び

ワイマル 羽佐間 柳葉

二次会は声荒くなり太くなり

停年退職世間俄かに遠くなる

堺市 吉田 圭井堂

我執去り難し還暦過ぎてなお

取れぬもの仕様ないわと只戻り

のど元が過ぎりや村議もそり返り

防府市 長野 井蛙

酔眼朦朧釣銭だけは確かと読み

ゆっくりと吸いつけ刑事は持久戦

報酬が流れる汗に比例せず

岡山県 直原 七面山

なよなよと吹雪の街ヘイボーイ

冬山へ屍の山を築く気か

花輪より金が欲しかったと遺族

ゴミ溜の中から詩人生れ出で

鳥取市 河村 日満

いい日和ネクタイだけが春となり

陳情のひとり朝昼晩と飲め

ストライキ朝を静かな町にする

豊中市 足立 春雄

お彼岸に今日も白衣の勇士がで

卒業式いねむりしてた子も唱い

試験前猫と主人は放つとかれ

倉敷市 木村 千容

候補者の云うほどムキになれぬなり

わが足と思えた頃が恋いしうて

倉敷市 田垣 方大

紅ついたビースは高いものとなり

定年のペンだこだけがよく目立ち

おめでたをまだだまってるレース編

地下足袋で今日も出かける考古学



大阪市 後藤 梅志

満開をうつかりほめた五右エ門ばり

奈良県 麻生 アート

なんのブランズ東の闇を生きる身の

犯罪のテキストめいたルボタージュ

吊革へ俺も目刺の一疋さ

春雷へ暮の一番がながくなり

下関市 桜川 不水

精薄の長所は母だけ知っている

鮮やかにだまして昼の湯に浸り

お茶漬けのように嘘つきウソを云い

推せん演説薩で神様ニガ笑い

ブランコを霞の空へ蹴り上げる

岡山市 浜田 久米雄

木の芽立ちなどと血圧こわがらせ

成人病いつまで生きる肌を脱ぎ

仲人を買って出る気がうすれかけ

デパートでのお見合は振り向かれ

大阪市 水谷 竹荘

老夫婦喧嘩の種がつかました

出張も栄転もなく看視老け

肩書を信じてマダムだまされる

柳井市 弘津 柳慶

傘さしてまでも花見を決行し

長男大学長女高校入学

親として肩の荷スツとおろしたり

京都府 大鶴 喜由

金沢風物詩

野良仕事紅の頭巾はお年頃

お座付のかわりか太鼓持ち出され

千代尼遺跡どこからとなく来たトンボ

長い長いトンネルを出て雪景色

祝い膳小さなグリが巾をとり

奈良県 西辻 竹青

この人と見込んで年増命がけ

奈良県 飯降 白香

朝日に匂う桜に老の眼を細め

健保では癒えない病が三月ごし

抵抗も粘り忘れたつとめよう

住宅街咳く声さむく耳に入り

ゾロゾロと花と霞へ人が消え

呉市 林 野麴光

身振りまで添えてガイドの唄も春

リバイバルにもならず手の節足の節

温泉場母に抱かれた日を思う

棺を打つ音愕然と部屋がゆれ

成り上り者だと自問自答して

岡山県 福岡 鉄児

淋しいやろうと犬も云いたそう

大阪市 後藤 梅志

奈良県 麻生 アート

金沢風物詩

野良仕事紅の頭巾はお年頃

お座付のかわりか太鼓持ち出され

千代尼遺跡どこからとなく来たトンボ

長い長いトンネルを出て雪景色

祝い膳小さなグリが巾をとり

奈良県 西辻 竹青

この人と見込んで年増命がけ

奈良県 飯降 白香

朝日に匂う桜に老の眼を細め

健保では癒えない病が三月ごし

抵抗も粘り忘れたつとめよう

住宅街咳く声さむく耳に入り

ゾロゾロと花と霞へ人が消え

呉市 林 野麴光

身振りまで添えてガイドの唄も春

リバイバルにもならず手の節足の節

温泉場母に抱かれた日を思う

棺を打つ音愕然と部屋がゆれ

成り上り者だと自問自答して

岡山県 福岡 鉄児

淋しいやろうと犬も云いたそう

大阪市 後藤 梅志

奈良県 麻生 アート

金沢風物詩

野良仕事紅の頭巾はお年頃

お座付のかわりか太鼓持ち出され

千代尼遺跡どこからとなく来たトンボ

長い長いトンネルを出て雪景色

祝い膳小さなグリが巾をとり

奈良県 西辻 竹青

この人と見込んで年増命がけ

奈良県 飯降 白香

朝日に匂う桜に老の眼を細め

健保では癒えない病が三月ごし

抵抗も粘り忘れたつとめよう

住宅街咳く声さむく耳に入り

ゾロゾロと花と霞へ人が消え

呉市 林 野麴光

身振りまで添えてガイドの唄も春

リバイバルにもならず手の節足の節

温泉場母に抱かれた日を思う

棺を打つ音愕然と部屋がゆれ

成り上り者だと自問自答して

岡山県 福岡 鉄児

淋しいやろうと犬も云いたそう



岡山市 服部 十九平

正直な被告を妻がはがゆがり

直筆にしては少うし上手すぎ

キス長し星の流れたのも知らず

西宮市 若林 草右

夢を見て夢を忘れる年になり

二三間濡れて開いた折たたみ

スーパーマーケット電車賃考えず

岡山市 田村 藤波

税務署で首も吊られず泣き寝入り

児島市 本田 恵二朗

女子大の四年になってまだあまえ

触角のように動いている大使

鳥取市 森本 法泉子

入院の妻に付添いて

男手の看護え声をかけられる

買物に男の智慧は念をおし

風呂敷の便利を妻に教えられ

吹田市 橋本 幸男

春の雨しばしネオンに吸いとられ

ママよりもパパがこまめに花を分け

堺市 高崎 雄声

朕富めり電化製品行きわたり

凱旋のように改札を出るスキーヤー

目薬をさして寝ながら見るテレビ

眉毛描くようにはゆかぬ顔形

島根県 藤井 明朗

道徳論PTAもくいちがい

子がうて税金の不云う日あり

岡山市 永松 東岸

BGの美しすぎて茶をくまず

長男はかまぼこ末っ子は野球

倉敷市 野田 素身郎

その恐さ知らず戦争映画好き

子供連れ春の日出へ疲れに出

芦屋市 丸川 初甫

白髪抜き抜き心の光り持ちつづけ

レントゲン写す度胸もなうて病み

岡山市 池田 古心

出稼ぎのたまに帰宅の夜は短か

女酒に吞まれパンティの行方

東京都 石居 高志

税務署へ車は遠く置いて入り

懐旧の情は出世の友になく

大阪府 早川 清生

死後に碑を文学解せざる故郷

教職に老いて驚くことも減る

土佐の旅

桂浜生活たづなに小石拾うも居

地方選挙

和爾会へ名を連ねたる区政ボス

大阪市 西出 栄

平安神宮だらりの帯に似た桜

人生の終点近くでネジ故障す

堺市 辻 圭本

長男入院

退院の喜びへ来る請求書

子に背中洗われ分る親の幸

女性とは見えぬ五人を育てた手

善通寺市 松岡 委治浪

追い込みは泣き声で来る選挙戦

加賀市 中松 恒雄

バー暗く雌獣雄獣のうごめいて

子の頭親はテレビのせいにする

倍増は倍働けととる明治

大阪市 児島 与呂志

時代層愛情までもテストする

金銭にうとい夫を大事がり

原因はテレビ父娘が無言なり

総社市 野々口 美舟

人事のように聞いているゆきおくれ

昇給を母と喜ぶ二階借り



見るただ黙って母の恋をみる
飯を喰うように異性をまだ求め

封筒の糊が気になる今日の文

西宮市 小 浜 牧 人

選挙戦花の風情をこわしに來

昼の風呂神経痛の愚痴を聞き

清貧を通した葬儀淋しかり

名古屋市 菱 田 満 秋

手配書の横でも候補者貼っている

愛情が湧かなきゃ戻ってくると云う

朝履いただけの靴べら持ち歩き

岡山県 池 上 知 恵 美

気の抜けた手で春風を握りしめ

自殺した窓から見てる春景色

よりを戻せよを戻せと海は云い

大阪市 橘 高 薫 風 子

「文楽協会」誕生記念興行を見る

でかしゃったでかしゃったという哀れ尽く

大阪市 榊 本 露 児

目印がヒチ屋と云うも気に入った

夢居道

黒衣着て一生すごすも好きなれば

トンボ切るその瞬間の醍醐味が

白馬スキー行

スキー列車座席の下に寝る若き

ザイラーに似た指導員もてている

スキー宿ヤットン節がもれてくる

奈良市 宮 口 笛 生

長女小学校入学

電車通学に重荷のランドセル

ええとこでテレビを切った夜の客

大阪市 西 川 晃

葬式から戻って一本つけさせる

万葉の山けずりゆくブルドーザ

魔性ちらと見せたる妻の薄化粧

魂の鎮む場もなし街の墓地

鳥取県 田 中 蛙 眠 子

判令へまだ内務省殿とあり

つつもたせみたいな選挙ブローカー

胃の調子まで手相見は占えり

春雨へ足を乱したデモの列

暖房完備東京の夜は寝苦しく

神戸市 仲 だ ん たく

食慾のあいの手に出すコンパクト

東京にて

この風邪は雨の銀座でひいた風邪

平田市 久 家 代 仕 男

基地の子も桜咲く日を待ち焦れ

君が代に感激もたぬ子が育ち

金詰り心のぞいて風が抜け

焼香が済めば空しさだけ残り

派手好み働き蜂の気も知らず

大阪市 本 多 柳 志

社用族自前でクラブ振りたかろ

演壇からは俺も浮動票に見られ

信仰をせん自由をも認めてや

かくし芸もって宴会よう酔わず

出雲市 原 独 仙

泥鰌掬い見直したわと酌ぎに來る

ニキビ潰し合って卒業日間近か

枯れかけた体ヘグロンサンパンビタン

新潟市 高 野 む じ な

小卒と当選三回太く書く

鼻あかす人はないのか無競争

軍隊の話に酒が追加され

大阪市 魚 住 満 潮

続西成界わい

達者でつとめていると刑務所から便り

パチンコ代置いときまっせと夜を出る

入れ墨の竜よ一生棒にふり

十九は二度ないツイスト夜を徹し

散髪をしているとこへ逮捕状



煙草の火借られる方も職探し

わてが惚れてまんねんと二十ほど違い

愛媛県 村上 旭 童

いくあてもないのが腹をたてて出る

働き甲斐のなかった怒り酔いつぶれ

下積みの笑顔忘れた訳でなし

太い墓たてて養子に意地があり

百姓がやめられますか野良は春

神戸市 傍 島 静 馬

ノート見せ合ううちに恋となり

仲値表競輪だっかと覗かれる

パパに守りさせて赤札漁ってる

春のピラ船も電車に負けていず

笠岡市 木 山 遠 二

日日好日人に上下の隔てなし

老衰とあり後輩の訃報じつと見る

では泊ろうと珍客すでに折れて呉れ

珍客が秋刀魚へも箸つけて呉れ

老夫妻して珍客の床をのべ

大阪市 平 沢 保 美

平身低頭読めぬ字を頂戴し

課長さんにさからいなやと送り出し

ベレー帽に根性残し似顔描く

姫路市 植 村 客 遊 子

夜桜へ落ち合うて去ぬ共稼ぎ

その人と居て苦にならぬ京の寒

老らくの恋手文庫に鍵をかけ

大阪市 河 井 庸 佑

自分では偉い先生と思ひこみ

程々にしとけとがめつさ指摘され

大阪府 谷 沢 好 祐

昼休み年功共は株のこと

ビジョンもう消えて百円亭主なり

堺 市 高 津 徹 也

はげたかをみたその夜の暗い夢

霧立ち込めて来て友人の妹と

鳥一羽見えぬ芦の湖雪模様

青森市 工 藤 甲 吉

百ヶ日過ぎて二号は名乗り出る

課長たらんとす踏まれても蹴られても

紫の袴をはいた妻も老け

松江市 小 林 孤 呂 二

決算期子等にすまない桜散る

当選へボスターの笑顔が忘れられ

春雨へ濡れて行きます立候補

大阪市 今 西 生 菫

有る時払いマダムの気ッ腑をマジマジと

京都市 室 井 八 九 寸

かがり火が花岡山へ盛るムード

観桜の音痴憶するところなく

落選へ桜すっきり散つちまい

同じ菓子容器かわれば名もかわる

井池へ丁稚脱皮の靴を履く

花素直ストも選挙も知らぬ顔

岡山県 横 山 一 声

謹告はいいが値上げのピラであり

消火器は埃のままで平和なり

小松市 関 戸 宗 太 郎

署名簿へ妻の遠筆みてもらい

うどん屋で変態仮名を子に教え

こんな会社でも潰れたら困る齡

美弥市 安 平 次 弘 道

旧悪もちよびり自伝に書く出世

運ちゃんに強いた花見の酒が仇

使い込みの記事をうらやみはつとする

恰幅で評価し又も詐欺にあい

宇部市 平 田 実 男

死んだ子の画がピカソにも勝る母

結局は違反上手の方が勝ち

戦死したのがいच्छ孝行する不幸

大和郡山市 中 内 孚 彦

入試にも遅刻するぬるま湯育ち



背のびさせとうとう息子のいのち絶ち
不合格砂かむ胸に迫り来る

貝塚市 杉本 一鶴

科学の落し子むごい児を産ませ

昭和のがんくつ王へ

不屈の斗志へ富士も日本晴れ

不朽洞總會に出席して

“来てよかった”肌のぬくもりじかに触れ

富田林市 浅川 八郎

新育児法感情押えて姑の

岸和田市 内藤 きさ子

扇屋にはたちぐらいの美少年

むらさきの数珠へ春雨まだ止まず

青森県 木村 涼人

春を待つ唄北の子の瞳は本気

集団就職やがて唄うか労働歌

倉吉市 奥谷 弘朗

妥協する余裕残して腕を組み

兵庫県 遠山 可住

鼻血出たくらいがこわい平和の子

乳なし児泣かねば乳が忘れられ

兵庫県 河原みのる

豪雪解けぬ

冬眠の蛙に似たり眩しすぎ

姫路市 隠岐 不酔

医者らしく二日酔いにもお大事に

大阪市 田中 敏行
ラッシュ駅晴着はなれてそつと立ち
分譲地ゴム長いとは知らなんだ

詠 近 舟 同



大阪市 橋本 緑雨
小売商共同でたてつく話をし

須坂市 高峰 柳児

煙突は斜陽と知らず吐く煙り

不渡りへワンマン社長を洗われる

東京都 阿部 佐保蘭

文楽座にて

客席も踊りたくなる式三番

一宿一飯雀さえずる話も出

祇園にて

袴足を覗かれさうに舞妓かけ

文楽に都おどりに旅七日

東福寺にて

絆纏の脱ぎ捨てありし石畳

和歌山市 秋月 宏方

小企業社長社長ともう呼ばせ

地盤沈下どうせ地球は土団子

丁髷はよかった交通禍も知らず

今治市 長野 文庫

定年の顔を教科書屋に買われ

作文を通して家庭覗かれる

辛くても一役はあり唐辛子

愚かにも首をくくってけりをつけ

ハンカチも洗濯させて夫人暇

大洲市 米沢 曉明

感無量母校の長に迎えられ

それもよからうと力は貸さず

幕一枚舞台と楽屋出来上り

カーテンをめくればほろを積んでいる

受話器の不平等えば挨拶もけろり

楽屋から瞬きもせず見入る親

名古屋市長谷川 鮮山

声に出ぬその感激をインタビュ

どんどんどんどん追い越され急ぎもせず

改まる口上になりまたとちり

方言の丸出しそれがお気に入り

それが子に有難くない老婆心



高須三味氏

川傍柳初篇研究 (三)

川端 柳風 清 博 美
高須 啞三味 藤 井 和 雄
前 田 喜代人 丸 十 府
柘 植 金 治 岡 田 甫

(17)
9 娑婆中にこわい物なき三年目

眠 狐

高須「この『三年目』は『吉原に売られて米てから三年目』ではなからうか。『石の上にも三年』で、もう吉原の生活にも馴れ、別れて来た『娑婆』にも、もう恐いものはいなくなった、という句と思う。

大門をそつと覗いて娑婆を見る

(タルー16)

で、遊女達は廓外に一步も出ることは出来なかった。大門外を『娑婆』と言った。

前田「夫と縁を切るためには、鎌倉の縁切寺東慶寺に、有髪の尼として、三年間辛抱すればよかった。しかし、子供がいたり、いろいろの誘惑等もあった。句の『三年目』は、それらの障害をのりこえた年あけの三年目である。『娑婆中に、こわい物なき』は、適切である。

柘植「『嫁して三年、子なきは去る』の三年を利かしているのではないか。三年目に子供が出来て、ホッとした句だと思ふ。

清「川柳で『三年』といえは、当然松ケ

岡のこと。従って、前田説に賛。

藤井「『三年目』を松ケ岡に限るより、柘植氏の女房説をとりた。ハラハラしていた三年目に、やっと妊娠らしい徴候を見てとたんに矢でも鉄砲でも持って来いと、強気になった女房殿の気持を想像すると、なかなか面白い句と思う。

川端「前田・清説に賛。鎌倉松ケ岡の東慶寺で、三年有髪尼の生活をすれば、夫との縁が切れたので、縁切寺と呼ばれた。即ち、其所で三年すごした女が今は大手を振って娑婆が歩ける、という句であろう。

丸「前田・清・川端説の如く、川柳で『三年目』といえは、松ケ岡の句であることに間違いない。松ケ岡の寺法は、当時の虐げられた女性への唯一の救いではあったが、また情夫と添い遂げようとする姦婦に適用されることのあったのも致し方なかった。この句は、その逆の場合で『娑婆中にこわい物なき』はその姦婦の図々しい、しやあくした心情を巧みに表現し得ている。傍三の『三年が内周男のたいくつき』は、その相手側。

三年が間有髪の尼になり(傍一48ウ) たった三年とんせいを廻らす (同14ウ)

三年の内に歯もはげ眉もはへ (同33オ)

などは、善良な女性の句。なお、松ケ岡の研究には五猪庵主人の『川柳縁切寺』がある。

岡田「ほかに穂積重遠博士に『離縁状と『娑婆』』(この書名いま本が手許にないため、記憶で)及び松ケ岡東慶寺の住持井上禪定著『娑婆』(昭30、小山書店)がある。前者は古川柳を多く引用、後者は松ケ岡研究書として一番詳しい。なお三年といっても、事実は足かけ三年で、満二年でよかった由。

高須「諸説承。但し、ボクは原解に固執する。『娑婆中に恐いものなき』という言い方が、東慶寺を出る女性に、ひどく相応しくなく感じるからだ。それに『三年』を必ずしも松ケ岡と断じる蓋然性がないからだ。『三年』には、前述の通り『石の上にも三年』のほか『乞食も三年』とか『苦

も三年たてば楽』等、多くのコトワザがある。古川柳だからとて『三年』をことごとく『娑婆』にしてしまうことには賛成しがたい。後考を待ちたい。

10 まだ骨を売本も買ぬ馬鹿な形

同

高須「古物買いと思うが、判らぬ。前田「傘の古骨なら、容易に買えそうなのに、この古骨屋、一本も買わない馬鹿な恰好だぐらいの意。『一本』をいっほ、『形』をなりと眺ませて、面白くしている。

柘植「歳々の市で、まだ『すりこぎ』も買わないで歩いている、客の姿ではないか。清「雨傘の古骨を買って歩く『古骨買』という商売があつたらしいから、その古骨買の恰好を詠んだ句であろう。

藤井「まるで判らず、不明。

川端「前田・清説に賛。

丸「前田・清説の『傘の古骨買』である。古骨買は、天秤棒の両端に四角の板をつり下げたものをかつぎ、『ふるほねはございござい』と町を呼び歩いた。元手は少々、よほよほの老人が多かつたから、一本なり二本なり買つてからなら恰好もつこうが、一本も買わぬ娑婆は、いかに馬鹿らしいものであつたらう。軽い街頭スナップ。但し西原柳雨氏は『正月扇箱買か』といっている。

古骨の片荷に椀が五ツ六ツ

(傍三32ラ)

古骨買については『守貞漫稿』参照。

岡田「こういいう句は、商人の句も集めてある西原柳雨翁の『川柳風俗志』に記載がないか、まず調べる必要がある。その

『労働者』の項三〇〇頁に「傘の骨買」の項がある。

大黒の骨や蛇骨を煤に売り

(タル三三三)

訳注に「大黒傘や蛇の目傘の骨を煤に焼く当日」とあるが、この句で見て「骨」に「古傘の骨」であることが分かる。屑屋でもバツヤに近い部類だから、ひどい身なりであつたらしい。

看板に古骨買は一本さげ

(安五楼二)

一本出来ると古骨買と知れ

(タル一五二)

などの句からしても本句まだ骨を一本も買はぬ馬鹿な形」の句のある所以が理解されよう。これを買って何になるかと言えは、まず破傘の紙が魚が店に売れた。今またいにビニールのような便利なものや、新聞紙もない時代のこと、傘の紙はいうまでもなく油が引いてある。即ち油紙だから、古傘の紙が利用されたわけで、水や油つきの浸みる恐れのあるものに好適、いわば昔のビニール代用品だった。古傘に包まれて来た芝魚に「うううう」な句もあつたと思うが、当時の小話か戯作にも文獻があつた筈。

高須「古傘買」という商売があり、その紙が魚屋に売れたとは、驚いたが、その古い骨は、何に使つたものか、また傘に作つたのだろうか？

岡田「紙は魚店とか油屋などに売つたがその古骨を何にしたか、記述した文獻をまだ見たことがない。但し「守貞漫稿」に「一古傘、大よそ四文、八文、十二文ばかりに之を買ふ」とあるのを見ると、やはり

古骨は傘屋に売つたものにちがいない。傘屋はこれを塗り直し、新しい紙を貼つて、再製したものと思つている。

藤井「丸岡田両先生に感謝、先輩・師といふもののがあつたさ、本論講ほど感じたことはない。

11 めれにぞ濡て蒼朮やく 五 英

高須「何か辞典を調べたら「蒼朮」は判ると思うのだが、今手許にある辞典には見当たらぬ。

前田「蒼朮」は、湿気を払うために五月の雨天にたく葉草。蚊やりに使つた。

「めれにぞ濡て」は、百人一首大輔の「見せばやな雄島のあまの袖だにも濡れにぞぬれし色はかはらじ」の文句取り。雨の中を「蒼朮や蒼朮や」と売りにあるく様である。清「蒼朮」とは、オクラの根茎を乾燥したものとか。前田説に賛。

藤井「めれながら「蒼朮や」と、やけになつて売り行く姿を、滑稽に詠んだものであろう。

川端「前説に賛。前田説の通り、小倉百人一首、第九十段富門院の歌の文句取り。湿気を払うために焚く葉草の「蒼朮」を、売り歩く蒼朮屋が、雨にすぶぬれになつてゐる、という句である。

丸「前田・清氏説の如く、蒼朮売で、やはり五月頃の街頭スナック。五月雨の頃だから、びしょぬれで売り歩いているのである。

鯉をおろして蒼朮をたいて居る

(傍二五)

なお蒼朮については「和漢三才図会」「大和本草」にくわしい。

岡田「諸説に尽く。

12 江の嶋へ四十二羽程とんで行

魚遊

高須「不明、まるで見当もつかぬ。磯船を書く資格などゼロだと、我ながら日頃の不勉強を恥じてゐる。

前田「江の嶋」は金亀山ともいい、弁天があり景勝地。不義をしたものが行くところ、厄が起き、また盲人が検校の信を得ると礼参りした。生島事件の老女絵島のこと。喜の守屋の台の物の異称。琴明の名称。この四つのが句に出てゐる。「四十二」は男の大厄年。「江の嶋」と「四十二」との

関連は、これ等からしては見ることは出来ないし、四十二の厄落としては大師に参る句はあるが、どうも合点がゆかぬ。四十二の男が江の嶋参りにゆくと解するか。もつと想像をたくましくして、四十二の厄落としに弁天様(遊女)買いをすると解するの

かどうもわからぬ。「四十二羽程」の「程」がくせものと思う。

清・藤井「不明。全くお手上げだ。

川端「不明。四十二羽を、素直に鳥と解してよいのではないか。何か鎌倉幕府の頃の故事でもあるのではないか？

丸「その通り。源頼朝が鶴の脚に金の短冊を結びつけて、由比ヶ浜で放生会を行なつたという話がある。その鶴が「四十二羽ほど」江ノ島の方へ飛んで行った、という句であつて、特に四十二羽といったのは、鎌倉由比ヶ浜から江ノ島へは、七里ヶ浜に沿って行く、その七里ヶ浜の七里をとり、日本の七里はシナの四十二里にあたるからである。

禽獸に右幕下物を入れ上る

(傍二一七)

鎌倉を羽根の生えてる金が飛び

(タル三四)

右大将日の出に鶴の放生会

(タル八六)

絵のように扇ヶ谷を四五羽舞い

(タル三三)

稲村ヶ崎で二三羽餌を拾ひ

(タル三二五)

などは放生会の鶴。

片足は四十二町の浪にぬれ

(タル三〇四)

はやはり七里ヶ浜の暗示。頼朝の放生会については「三義雜記」の「頼朝郷放たまふ鶴」の条に考証がある。

岡田「前説に賛。有名な故事。

高須「そんな故事があつたのか、と驚いている。古川柳を解するためには、何でも知らなければならぬが、そんな歴史的に何の変哲もない故事を、川柳にして、何が面白かつたのか、と言いたい。ただいたずらに難解にしただけで、七里ヶ浜を四十二里としたことだって、何の意味も感じないのだが、類句が沢山あるところを見ると、やはり知っていなければならぬことか。

13 いい智慧を出して牽頭にかつ消れ

秋紅

高須「遊び場で、何か面白い事を思いついたが、朝間に一笑に附された、という句だと思ふ。やはり吉原の句であらう。

前田「賛成。

清「一笑に附されたのではなく、タイコ

に判磨者扱いにされたと解せないか。タイ
コの営業妨害の虞で。

藤井「消説をとりた。遊びの席で、い
ささかあきて、河岸をかえて一遊びしよう
とか何とか、名案を出したのだが、商売上
の工合の悪さから、閑髪を入れず、タイコ
が得意の話術で、うまくカツケしてしまっ
た、というのではないだろうか。万事金
にぬけ目のない商売のことだから、そのタ
イミンダのよさを詠んだものと思う。

川端「確稿に賛。タイコ持は客の機嫌をと
ったり、酒興を助けるのが仕事だから、客
が何か面白いことを思いついても、タイコ
持の方に話題をさらわれてしまったのも、
止むを得ぬことであらう。

丸「い、智恵」とは、妙案ではなく、
今までの放蕩をやめて、堅い人間に立ちか
えろうという分別で、せっかく殊勝の考え
を出したのに、タイコ持にこっぱみじんに
笑殺されてしまった、と今までは解してい
たが、高須説を見て、そう軽く解しておく
方が本当のように思われる。岡田三面子先
生も「若旦那の発議をけなして、ソイツァ
いけませんと、同意せぬというだけかと思
う」と解している。太鼓持（牽頭・幫間）
については「洞房語園」「嬉遊笑覧」「松
屋筆記」等にくわしい。

岡田「丸君の前説をとる。「い、智恵」
とはもう遊びは止めようという、改悛説と
考える。

14 桐の太木をねかして燵をせめ

葉十

高須「桐と燵だから、タンスに關係があ
ると思うが、うまく解けね。

前田「桐でタンスを連想するのは

桐の木で二棹出来る縁遠さ

などの句があるから、当然と思うが、また
琴になり下駄になるのも桐の運

（拾二〇）
という句もあるから、この場合は琴とみ
て、琴をねかして「さア弾け」と「嫁を責
め」ているところと考える。

藤井「もちろん若い嫁で、ちよつと芝居
の琴責めを思わせる風景だが、これはなご
やかな正月の弾き初めか、珍客へのもてな
しか、一種の嫁自慢であらう。

川端「前田・藤井説につきよう。川柳に出
て来る姑は、意地悪なので、嫁がハニカン
ているのを歯痒がって「早くお弾き」とせ
きたてているのである。

丸「前田説でよい。「責める」のは姑と
限らなくて、夫の友人、または親類などと
見てよからう。立てかけてあった琴をねか
して（据えて）「さあ一曲きかせくれ」と、
嫁して間もない嫁をせめたのである。
現代と違つて、当時の嫁は琴の弾けるのは
当然であつた。

琴を直して燵を引ッぱつて来る

（傍一三〇）

岡田「歌舞伎の阿古屋の琴責めを、趣向
としてきかせてある。

15 文は届よふが金ほうさんだよ

同

高須「文はとときようが」と読んで
「届けようが」という意味。「うさんだ
よ」というのは「胡散だよ」で「怪しいも
のだ」とか「疑わしいよ」の意味。それ
で、妓女に文を頼まれた人が、「文は届け
ますが、金をよこすかどうかは受けあえま
せんよ」と言った句。

前田「賛成。会話的手法をうまく生かし

ている。

川端「妓女がつけ文するものか、ちよつ
と疑問。逆に男の方が外出禁止で、親しい
友人に手紙と金を頼んだ、という見方は如
何。親しい仲だと預かった金を「持つて
ると使い込むかも知れないよ」程度の冗談
は言う。それを詠んだ句ではないか。

丸「川端説の如く考えられる。「評釈川
柳」初篇にも「（柳雨）文は確かに預か
って行くが、あの男のこと、直ぐに金をよ
こすかどうかは受合われぬよ。（三面子）
夫は違ふ。男が女が一方から、他の一方へ
文と金とを頼まれた場合に「文は届けよ
うが、金の方は怪しいよ、途中で使つて仕
舞うかも知れぬよ」ならん。（柳雨）御尤
も前説取消し」とある。

岡田「遊女から客への文は、廓にいろ
「文使い」という、そういう雑用をする男
がいて、それに頼み、客に頼む場合は皆無
に近い。まして、金の無心などの手紙は、
尚更である。また客が遊女に金を送るのに
も、友人を頼むことはほとんどない。これ
は普通の場合、その近く、あるいはその家
へゆくなら、文と金とを届けにくれと、友
人に頼んだので、三面子博士のいうような
男女は考慮する必要はあるまい。

16 俄雨元手をやたらかしてやり

米子

高須「この半丁、難句多く、不甲斐ない
が判らぬ。

前田「後醍醐天皇に仕えた日野小納言資
朝が、東寺の門で、俄雨のために雨宿りを
したところ、乞食が沢山集まつていた。
俄か雨靴ももたない雨やどり
（タル一七）
俄か雨箸ももたない乞食なり

（タル二四）
これ等の句からして、何ももたない乞食に
元手（資本）を貸してやった、という洒落
を詠んだ句と思う。

拓植「俄雨で、傘屋に飛び込んで雨宿り
してるのを、主人が古い傘でも貸してやっ
てる事を言つてゐるのはなからうか。

藤井「拓植説に賛。俄雨で困つてゐる
人達に、見かねて傘屋の事主が、商売を
忘れて金をとらずに元手のまま（傘を）貸
し、すんだらおかし下さいと云つた所。
傘を「元手」と云つた所が、ミソと思える
川端「傘」とは越後屋呉服店の傘のこと
で、越後屋では俄雨という店則として
傘を貸したが、その傘には越後屋の大きな
屋号が書いてあつた。当時としては奇抜な
宣伝だったのであらう。「元手」とは、こ
こでは屋号入の番傘のこと。句意は、俄雨
に越後屋の屋号を書いた傘をどしどし貸し
与えたいというだけのこと。

丸「川端説の如く考へる。用意の傘も元
手のうちにはいるはず。「元手をやたら」
は、そうした見方からの表現であらう。

高須「果たして越後屋であらうか。越後
屋の歴史が判らないと、素直に賛成できぬ。
藤井「越後屋——江戸日本橋駿河町にあつ
た呉服屋、三井八郎右衛門が延宝元年に開
店。三越の前身。祖先が越後守高次と云つ
たから越後屋と云う。（広辞苑）延宝は家
綱（四代）の時代、「川柳」初篇は安永
九年発行、家治（十代將軍）だから、川端
説でよい。

岡田「越後屋の貸傘は有名。「川柳江戸
砂子」「川柳江戸名物」にくわしく、例句
もたくさん載せてゐる。

輪講誤植訂正（前号）

十二頁上段七行目「句意には「句意は」
十二頁下段二十行目「江尻には「江尻に」
十三頁上段十一行目「前田・高須」評は
「前田」高須評」と訂正。

からくり

祝い膳



東野 大八

サラリーマン二等兵になつてちようど一カ月目、県庁の友人二人が就職祝いをやってくれた。

友人といつても県庁の部長と次

長なので接待場所もやつがれの出入する安ものの飲み屋とどだい格がちがう。床の間に寛齋まがいの対幅があり、その上には青銅の香炉、それを背負つてビロードのひじかけつきの座敷イスがある。主賓が僕なのでその結構な座に取る、お尻の下に絹ふとんがボンボコにふくれ上つているので、腰を下ろすなり坐りそなつて前へめりかけた。あわてて思い切り後へはね上つたら、安ものの靴下が二つとも足首で輪になつていた。

「こんなフutonは性に合わん、まるで馬のおしりで茶をのむ具合だ、ウスイのととりかえてくれ」といったらチョビヒゲの部長の方が「宿直室からとりよせるか」とわらつた。

やがて油つぽから出てきたような美人仲居がおしほりをもつてきた。ひろげてみるとフリンと香水の匂いがした。

この家はご当地でも超一流で、むかし伊藤博文が愛妾をつれて居つづけしたところである。新らしくは天皇陛下がかしくもこの部屋つづきのところで御寝につかれたという。

これだけの格式があるところなので、女関を二歩入ると世の儀のことではない。お局さまみたいなA級仲居がずらりと整列しいらせられましよう。式に平伏する。歌舞伎のどこかでお眼にかかったようなどころがあるが、おんぼろさんぼろのこちとらにとってはいいやはやどうもキモチが悪い。

「どうしてこんなところへ連れてきたんだ」

とおしほりが引き退つたとたんに僕はコボす。

「二流、三流となると身ゼニを切

らにゃならんからな」と次長がいった。この仁は僕によくにてズバズバ言いたいことをいう男で、僕とひどくウマが合う。それがこう説明したのだからピンときた。

(ナルホド、社用族とおいでなすつた。するとオレは超A級どころの接待客とみてくれるというわけだ)新聞というやくだいもないもので多年めしを食つてきたそこは神経、うまいことを考えやがつた、と心中苦笑したが、口に出してそれをとがめるほどこちらにも聖人君子でもないし、ヤボでもない。

「イロイロすまんのう」

とちとふざけてお殿様のようにわざと大仰にそっくり返つてみせた。それでこの二人、気が和んだとみえ

「君一人じゃない、むしろ二人もケンタイにおしよるばんでできるんだぜ」

とタガをはずした恰好になった。

やがて超一級の酒宴がはじまつた。芸妓が三人、仲居が一人、膝

前の膳は脇膳、向う膳で、手にする盃はビタッ、ビタッと動いた。指先にくっつく。いわずと知れた特級中の特級酒だ。

芸妓三人のうち、一番年がさの老妓は、僕のななめ前方でビタリと先代萩の政岡みたいに坐り、僕の盃が空くとしすしと赤絵の見

事なお鈍子を取りあげる。他の二人も僕の両側に膝をむけて、ソツうならじと寸分のスキもない侍りようである。

天皇様が伊藤博文かしらないが、ここへくる芸妓は御当地検査でも選り抜き中の選り抜きでウツサによればここへ呼ばれる芸妓は、鶴八鶴次郎を地でいく芸一本、不見転などはトンでもない話なんだそう。

とにかくそんな格式ある政岡老

酒

清



灘・魚崎

大塚合名会社釀

妓にお鯉さんか幾松みたいなのにこう厳重監視されていたのでまるでドモの又平が將軍家の奥座敷へラッ致されたようなものだ。酒は申し分ないが回るところがこれまでと全く別な方向で、ヘタをすると悪酔いをするおそれがある。僕はだんだん肩が凝り、ふくらはぎがひきつり出した。そう思うと

尻の下のフutonまでがまるで木魚の頭にも坐っているようなあんばいである。

ところが具合よく芝居もどきに目くばせし合つた妓三人がつと立ち上ると入口いきいきと控えた仲居が合いのフスマをさりと開いた。そこには金屏風サンたるヒモウセンの一間で、三人はたちまち所定の位置についた。政岡が三味線、つぎのが語り、一番若いのが舞扇を前に一礼した。

鳴りものが入つたところで僕はチョビヒゲを「近こう、チコウ」と手でさし招いた。主賓がやたら席からとび出す場所ではないからだ。

「もうこの辺で結構じゃから、別のところへ行こうよ」

「いこうってどこへ」

「駅前」の「たぬき」さ」

「つまらんが、ここ」

「うん、塩からで二級酒飲んだ方が胃袋も安心するよ」

「……?」

白けた顔をしてチョビヒゲは座へもどつた。そして次長とボンボンやつていたが、まかしとけ、という顔で次長がはい出してきた。

「二次会は早い、それにこれからが飲み会じゃ、お前は客じゃから黙つてのんどりゃええんじや、大事な客ということじゃから、早くたつとこの女将が怒りよる。お前はええが女どもが迷惑する

ぞ」

「大事なお客、一体それは誰じゃ」

「お前だよ」

「お前のオレで影武者だとわかつとるが、大事なお客というその本モノの接待客は何人というんじや」

「それは言えん」

「そうか」

「おい、起ち上ってどこへいくんじや」

「どこもいきやせん、便所じや」

「胸下駄をはいて、一番奥の端のこのところへいってホースをとり出し僕はしばらく考えた」

「まあ、向う当分こんなところへは来とうてもよう来れん、そんなら思い切り飲んでこましたるか、あの二人もそれで気がすむじやろ」

「そう結論づけ度胸をきめると、急にあの二人がいきどおろしくなつた」

「これがお役所の高級お役人のやることなのか」

「駅前でも屋台店でもいい、安酒のんでワアワアいう、それでこそオレにふさわしい祝いの、席といえるのではないか。ブンブンして胸下駄をワザと音たてて踏んづけながら廊下へ出たら、いつのまにやら次長がそこに立っていて

「ええか、もう三十分ぐらいはがまんしてくれ」
と懇願した。

「ああ、いいとも。小便したらカクゴがついた。一時間でも二時間でもつき合うよ」

「エライ、それでこそお前だ」

「部屋にかえると僕は人がちがつたように大あぐらをかきノビノビとやり出した」

「こんなまじろこしいもんは面倒くさい、大きい奴でくれ」

「マア、といったあきれ顔の政岡だったが、そこは商売気さくにはいい、はい、と注文通りにコトを運んでくれた」

「伊藤はんは、いつも宴会では湯呑に二ハイあけはって、それからお盆にしゃはったそうです、それが伊藤はんのくせやったとか」

「伊藤はんとは誰や」

「博文さんですがな、ハクブン」

「ああ、こんどの千円札か」

「政岡はこの僕の一言にぐつと語つた」

「オレはな、めざしで合成酒を飲むのが好きさ」

「どういうモノのはずみか、千円札のつぎに僕の口からこんな言葉がとび出した。ホイ、しまったというのと、部長の顔とまともにぶつかったので急いで

「もっともこれは若いときの話しやがナ」

とこまかした。

とにかくこんな具合で酒は進んでいったが、とうとう日暮れから夜中まで飲んでしまった。政岡以

下はもちろんとつくのむかしに消えていて、僕は膳運びのおばさん仲居といつのまにやら肩を組んで「風か柳かカンタローさんか」を合唱していた。

「一体、先達の妙なお客さんは何

曲解

長野文庫

ものですか」

「こんどは政岡芸妓以下に部長、次長の僕の友達が責められる番だろをもつとも宴会すれのした彼等のことだ。案外面白く僕を座持ちのサカナにする理屈だろう」

ここに「徒然草私感」という武者小路氏の著書がある。この本は徒然草のよさを賞め讃えている本で、序分の一節に「全篇を通じて感じingことは、徒然草の作者は、秀れた宗教家というよりは、常識の発達した、わかりのよい、感じのするどい人で、ものの感じかたが正直で、書くものは実に素直で、ぶるところが少しもないことだ。読者を軽蔑していない、無駄な説教のところが少ない、興味味を持ちどころが実に人間的で、正直である。だから時が経っても少しも色があせない云々」とある

通り徒然草を必読の書として推奨しているのであるが、若しも書中の一節大けを取り上げて難癖をつけるならば著者は心外に思うだろう。例えば「理屈で終っている。これだけでは兼好は本当に悟っている男とは思われない(七一頁)」

う。

先般も私がある雑誌に選句の事に就て私見を開陳したが、文中「没句を見ずして選句の批評は当らないと思う」という個所を取りあげられて反問をうけたが、引用に当って「没句を見ずして選の批判をすることはおこがましい限りだ(傍点筆者)」という意をもらして抗弁しているが」となっているのは気になる「当らないと思う」というのと「おこがましい限りだ」というニュアンスは甚だしく違ふのである。引用の場合に勝手に言葉を変えて「という意をもらしている」という表現は真意を曲げるものだと思いたい。殊に「そんなところへ逃げをうつのはまことに卑怯な話で選者の無能さを暴露しているようなもので」というに至っては侮辱も甚だしい固より最高の選者だとは思っていないが、短かい私見の一節を捉えて頭から無能の烙印を捺すことは「選者論」の域を越していると思う。

更に「あの選は最上級なんだよ」と言いたいのだろうが」などと勝手な臆測まで添えているのはむしろ滑稽にさえ感じるのである。要するにわれわれは物を見る場合よく総意を捉えその真意を的確に掴まえて批判を下したいものである。特に引用の場合には原文そのままの引用を望みたい。



「有情」の三つの潮流

河野春三

紫の椅子の愁いはわが愁い 薫風子

紫は沈んだ華やかさを持つ品格のある色だ。私は二十年前までこの色が最も好きであつた。今はどんな色にも興味を覚え魅力を感じとるようになったが、これは私の魂に純粹さが薄れた故か、或は人間として幾分成長して来た故か、おそろくそのどちらでもあるのだらう。私は紫の椅子にしっかりと腰を下ろして、沈んだ華やかさを持つ品格ある詩情を肥やして行きたい」

私は「有情」を一気に読んで、(句集というものは一気に読むというべきものではないと思うけれども)、同時に薫風子という作家の「紫の椅子の愁い」をはっきり感じとつたのである。

私も若かつた頃、「紫」という色に惹かれた時代があつたことをまざまざと思い出した。そのあとで、川柳雑誌十二月号で北川

春果さんの、「有情」を読んで「を一読したが、私とは相当感じ方が違ふ事を知つたのである。

春果さんは文中随所に、薫風子氏は田満な常識人である。世の中の酸いも甘いも知りつくしている……というような所見と、その裏付けとも見られる作品を列挙している。

勿論それらの句からそういう結論が感じられぬではないが、私が「有情」を通読したところでは「田満な常識人」というような印象はあまり受けなかった。

私のうけとめた薫風子はやはり青年作家らしい(本当は三十六才とあるが)感傷と、人間への肯定と否定が彼の体内を吹き抜けていて、懷疑の多い——それ故に又静かに「考える人」のポーズをとっている面が多く、いかにも青白いインテリのもつ作家精神が感じられる。作者は実際には常識人というような面よりは、寡黙で静思の詩人

人といったタイプの人ではあるまいか、ただの川柳づくりではなくて、一つの人生完成途上の苦悩を秘めている作家なのではあるまいか。「紫の椅子の愁い」は即ち彼の作家としての一つの性格であつて、彼がそれを越えてゆくところに「或は人間として幾分成長して来た故か」と述懐しても、所詮は詩人としての性格として今後も「紫」を一生背負うてゆくのではないかと私は思うのである。

2

「ふあうすと」誌上で、泰徳三氏が「有情」の批評をしているのを見たが、ここでも、あまりこの句集を感心していないようであり、彼がチェックした句はわずかに五句であつた。

然し私にはそうは思えない。

ここで私は「有情」の作品を鑑賞して見て、凡そこの句集には三つの傾向、三つの潮流があることを率直に指摘し、この三つの潮流が、今後どのようにその比重をかつてゆくであろうかという点に私の興味がかつているかということを述べて見たい。

第一の系統は伝統派的な作品で、生活日記のトリグイアリズムと、いわゆる三要素的な既成川柳といつてよいもの。勿論この傾向の中にも幾つかの段階があつて、適確な穿ちやユーモアや軽みが、そのよさを示しているものもあるけれども大半は日記川柳的な、平凡な安易な境地の述懐にすぎぬものである。

例えば

妻がもう口あけて寝るようになり

1
昨秋、京都の僚友上田枯粒氏から、近頃「川柳雑誌」の橋高薫風子という前向き作家と文通しているという便りをもたらつた事があつたが、それはそのままに聞き流していたが、このお正月に三十年ぶりで川柳雑誌社に麻生路郎氏を訪ねて歓談した折、林さんから「有情」や「福寿草」「人間横町」などを願ってもらつたので早速薫風子さんの句集を拝見したところ、中々よい作品が沢山あつて、かなり惹かれるところがあつた。それで直接著者へ、厳正な立場で、批判と鑑賞とを兼ねた私見を申送つたところ、大変喜んでもらい、謙虚な御返事を頂いた。

私はまだ薫風子さんにお眼にかかつたことはない。「川柳雑誌」四二三号の「不朽洞の人々」に同氏の写真と、一家言が載っているがそれにはこんな事が書かれてある。

落選の酒は問答無用なり

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅

看護婦の恋門限を口に出し

鏡台の前の思案はたかが知れ

出来心ダイヤの指環していても

泊る気になって外したイヤリング

独身の机の上の磯じまん

こうした作品は相当数採録されている

が、こういう句からうける作者は私に、や

や失望しか与えない。作者の眼が対象に向

って働きかける態度に、感服も衝動もな

く、いわゆる「川柳」というものを作り上げ

る」というアミューズメントしか感じられ

ない。大体伝統派の作品は、相当古くから

関東調、関西調というものがあって、関東

調は井上剣花坊をその祖として「空ち」や

「諷刺」に重点をおき、関西調は、西田当

百、浅井五葉、岸本水府らの系列をひい

て、「軽味」「写生」ということに重点を

おいて、いかにも関西らしい軽いユーモア

や生活の記録的なものが多かったのは今日

にも尾をひいているが、これはその特長を

甘く生かすと、関東派のようなドギツイ穿

ちや諷刺でなくて、微妙な人間の生感を軽

妙に描くということが出来るのであるが、

大抵の場合は平板な日常茶飯事の報告にす

ぎなくなり、川柳が文学としての基盤を失

うことになり勝ちなのを警戒しなければな

らない。

第二の系列の作品は三要素に縛られた既

例えは

病み上り街は光に満ちあふれ

春斗の真ッ只中に子が生れ

喪服着た妻に女が残ってた

つとさした夫の傘の大ききよ

妻の留守食パン真ッ直ぐに切れず

四面楚歌故郷は豆の花の頃

竹植えて雨うつ音を染しめり

もう嘘を見抜いて母の眼が優し

妻若し水道一ツばいにひねり

等々であって、この傾向の句にはもはや三

要素的な「川柳味」から脱却して、彼のい

う「紫の椅子の愁い」的な詩性が感じら

れ、生活川柳として素直なよさがあるが、

よく見直してみると、内臓するものに厳し

さが欠け、いわば「植物的生」が見え、安

堵しすぎた安易さがあって、私達の胸に迫

るものに乏しい。東洋的なあきらめの精神

に近く、誰かがいった「老成」という評言

に価すると思う。

第三の系列は私達が考える現代川柳とし

て堪えるもので、ここで初めて作家橋高薫

風子がその精彩を放っているとい私は考える

のである。

ここでも二つの段階がある

(A)

労働歌謡が歌えば凄かろう

学生を矢面に立て国貧し

都会の夜セロリは母の香に似たり

檻の鶴又眼を閉するほかはなし

牛小屋に月光美しき浪費

似は似ても狼の影犬の影

蜘蛛の巣の憎し一糸も乱れぬは

莊嚴ミサ嬰児祈らず神に近し

渡瀬船も恋も一日位置を換えず

わが妻になすべかりしを賀状書く

青天の霹靂乳房黒くなり

原始から女の姿水を汲み

(B) 椅子蹴って立ったに続くものかな

し

若い目が見ているんだぞ政治家よ

蕎麦の花地球滅びるなど思えず

失いしものと得しものこの友に

雑念をしずめる丸き壺は持ち

蛇行して蛇行して川淋しけれ

惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華

草いきれ万葉の世の相聞歌

青春は旗幟をたたくことくなり

人の世や棺に打ちこむ釘もあり

手をよごさない生活がふとさびし

(A)は私が推選する佳作 (B)は(A)よりやや

落ちるが、表現に難点のある句。勿論私自

身の勝手な選抜であって人によってうけと

り方が違うと思うが、少くともこの項にあ

げた作品からは、作者が円満な常識人とい

うには当てはまらない詩人らしい孤独と、

個性ゆたかな感性と知性、常識川柳にあき

たらぬ内省的な短詩精神、高度な社会批判

などが見られ、ここに路郎氏の影響も大い

にあったことと推察される。

ここで短評を許してもらおう。

○労働歌謡が歌えば凄かろう

一つの道を果てしなく「無言の行」をつ

づける蟻の行列を蔑視して作者が高ら

かな労働歌のデモに連想をもって行った

のか。或はその逆の場合も考えられる。

「凄かろう」に直截な作者の主観がある。

開巻第一にこの句を置いたところが背け

る。私の戦前の作に

踏みかけた蟻の列のあまりにも長

き

○学生を矢面に立て国貧し

「国貧し」が説明的で安易でもあるが、

「学生を矢面に立て」に社会風刺が痛烈で

ある

椅子蹴って立ったに続くものがなし

啄木の「はてしなき議論の後」という詩

にある有名なウイナロードと呼び出すも

のなしを想起する。インテリの無行動精神

への作者いかりか。

○失いしものと得しものこの友に

「この友に」の「この」が独断であろう。

具象性が要求せられる。

○都会の夜セロリは母の香に似たり

句品、格調、感覚ともに可。「都会の

夜」の措辞又凡でない。

○かかる時海の晦さを持つ蚊帳よ

よい句と思うが、前書付の作品故別扱い

としよう

○わが妻になすべかりしを賀状書く

この感慨に作者の人格を発見する。案外

く。
○十二月宝石の美の極まれり

よい句と思うが「十二月」が「美の極まれり」のきびしさに對して怪いのではないか。

○極月の、宝石の、美の、きわまれり
として極月という堅い言葉を使った方がよく、の字三字連ねて強調した方がよいと思うが、「極月」の「極」と「きわまれり」の「極」が重なり、ところどころに、やはり原句のままにしておくより仕様がよいと思う。

○独楽二つ廻りいることは息苦し
作者の内面生活が伺える。静思、反省の作者の息吹きが独楽を通して感じられる。私の作品に

◆おのが影追いつつ独楽は乱れ伏す

◆子等として独楽のとまりしこと見届く

というがある。参考までに。

○浚渫船も恋も一日位置を換えず

一見何の因果関係もない浚渫と恋とを並べて「一日位置を換えず」と定着したところ非凡であるが、その対比にやや「穿ち」が感じられる。

○雑念をしずめる丸さ壺は持ち

反省と沈思の作者が、「壺」を通して、安住感を詠んだものであろうが、先人の作品にすでにこうした境地は読み古されているようである。「壺は持ち」は少し推敲不足と思われる。「壺は持る」「壺の位置」「壺光る」「壺に坐す」といろいろ考えているうちに今度は「丸さ」が気になって来た。阿々。

○檻の鶴又眼を閉するほかはなし
佳句であるが「ほかはなし」は常套語で一考を要する。

「檻」は猛獣を想起するので「禽檻」「禽網」

とでもしたらと思うがこんな成語は未熟かも知れない。

○惜しみなく愛は奪えと曼珠沙華
「惜しみなく愛は奪う」と有島武郎の著作の題名である。勿論この句はそのパロディではあるまいが……。「曼珠沙華」と揃えたところに作者の着想は認める。

○青天の霹靂乳房黒くなり
逞しい句、含蓄もある。坐五は「乳房黒く見る」「黒ずみ」等々重くした方が、上の句の重圧に堪え得るのではあるまいか。

○牛小屋に月光美しき浪費
「浪費」が作者の手腕であり更に「美しき浪費」は作者の力量であらう。然し句に深味はない。

○似た似ても狼の影犬の影
佳句である。傾向がかわっているが、作者の眼に狂いはなさそうである。

○青春は旗幟をなすところなり
「青春の」としてはどうだろうか、句意は明瞭で、付け加えるところはない。

○若い目が見ているんだぞ政治家よ
平明、ズバリでよく分る。一歩あやまる

とスローガンになる危険性は孕みつつも。

○日当りの悪い窓なり株式課
私が頂かなかった句、これがいいわゆる「川柳」で、

◆銀行員朝より螢光す鳥賊の如く
これは金子兜太の有名な造形俳句である。

○莊嚴ミサ嬰児祈らず神に近し
敬虔な内省的な作者を見る。重厚さを感じよう。

この句集を見てから「川柳雑誌」の川柳塔を見ていたら

十二月某日ブランコ揺りいたり
六法全書の重さと聖書の重さ 同

十二月某日ブランコ揺りいたり
六法全書の重さと聖書の重さ 同

というような句にぶつかり、益々今後の作者の精進に期待するところが大きくなった。

「有情」の三つの潮流は、前向きな姿勢をとろうとする目覚めた作家が誰しも経験する一つの過渡現象として、貴重な足跡であらう。思うにその作句経歴はまだ七年ということであり、この句集は初期の作品から現在まで集めていたための三つの傾向の混線が見られるが必ずや作家蕨風子は今後幾多の壁にぶつかって、脱皮に脱皮を重ねていつの日か第三の系列の作品ばかりの優れた作家として私達を畏敬せしめる日が来るのではあるまいか、彼の第二句集がそんな姿で現れる日を私は切に待望している。

彼が「魂に純粋さを失う」たり「人間として幾分成長した故か」というような感慨を捨てて、あくまでも闘志と、「紫の椅子」の抒情とを忘れずに、短詩作家として燃焼して行くことも願うのは私一人ではあるまい。

現在の「川柳雑誌」の作家の中では有数の貴重な作家として私は注目して行きたいと思う。

尚この「有情」の一つの特色として前書付けの句が、頗るうまいことである。

前書付の句というものは大抵月並みな、上滑りなものが多く、彼はそんな場合でも、真実をこめて、或は悲しみ、或いは喜んで、一句たりともかりそめにしないその真摯さを買いたい。

豆秋さんを悼む
七七忌金魚の糞もただならす
母再び入院
かかる時海の晦さを待つ蚊帳よ

砂丘有情お前と月の出を待とう
こうした句を見るとき彼の真情がよく伺える。最後の句は本句集の「有情」の出来となったものと思われる。私はこのお正月

は山陰地方を旅行したが、鳥取の砂丘では横なぐりの吹雪に馬はうなだれ、路は雪の中に車の轍が深くめり込んで幾条かの筋を曳くという荒涼の砂丘で、到底蕨風子の作のような有情はなく、怒り狂う日本海を見下ろしながら、ジーンと震え乍ら砂丘を上った下り下りした事で、風紋どころの騒ぎではなかったが、蕨風子作品のような和やかな日にもう一度訪れて見たいと思っている。私が現在住んでいる此花区というところは蕨風子の作品に

瓦斯タンの傍で結構人が住み煙突の高さも高し此花区寒空へどの煙突も煙吐き

とある通りの此花区の西北端で私は東洋一とかいう無水タンクの怪物と、灰色の運河と防潮堤、いつも私が吊り上げられそうな錯覚をおこすクレインの群におびえる日常生活を過しているが、彼の奥さんの実家が私の家の近くにあるというような私情を頂いたのも何かの奇縁か。蕨風子さんの御精進を祈って擲筆しよう。

（一九六三、三、二九）

色紙短冊
書画用品

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

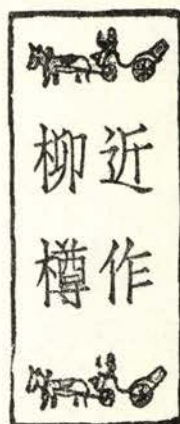
大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ

大坂戎びる
丹精堂
市川セニ、七ニ



麻生路郎選
北川春巢選

うちの子をすべらせ何が人づくり 京都市 小黑 王石
くり言は話せば長い三昧が鳴り 同
忠孝の義務は知らずに伸びた背 同
社長今日チャールズのベレー帽 同
大物を呼び目標は浮動票 同
思想ゼロ靴も頭もよく光り 同
光陰は祇園の名妓市場籠 同
遺体出るまでは奇蹟も希うたに 竹原市 杉原 愛鳩
月末も知らず四季だけある余生 同
倅せは手織木綿のような妻 同
いつからかタンス拭かない妻にな り 同

革新を叫び二号にバーをさせ 同
花の下バタ屋も愛想つかすなり 金沢市 山本 木象
行商人米ともかえる荷をひろげ 同
金魚屋の屑でわが家も初夏に入り 同
ほろくそに云うてた職を子に継 がし 同
孫の目へおそるおそるの昼の酒 同
倅せを折るベン先引っかかり 吹方市 宮川 珠笑
二次会へ一文なしでついて行き 同
ふるさとは夜の便所へつれが要り 同
泣きごとを聞いてわが身 のさちや 知り 同
徒食するこの頃ながら罷は伸び 鳥取県 鈴木村 飄子
砂丘には砂丘の草が花をつけ 同
今からが善男リボン胸へつけ 同
雲水のコケシ並べたように立ち 同
境内へモダンな保育園が出来 見島市 伊丹柳 瓢子
高いびきあしたのあるを信じさせ 同



芸術は長し

川柳の道も
八木摩天郎

堺小唄に

「物の始めは何んでも堺

三味も小唄もみな堺

ホンニツヤンヤヨイサ

カイ」

と云う民謡の通り、お国自慢ではないが、思えば三味も小唄も堺が始めである。永祿五年琉球から蛇皮で張った二絃の楽器が、堺に舶載して来た事があった。幼い頃から失明して琵琶法師になっていた中小路検校は、之を試めしに弾いたが、どうも音律が節に合わない、憂いのあまり長谷の観音に一七日の間参籠して弾きようを祈ったが、一日霊夢を見て階段を下る時、大中小三筋の糸が足にかかったので之れにヒントを得て、三筋の糸をかけて弾くと微妙な音色が出たので蛇味線（二絃に一絃を加えて三絃とした。それ故三味線と云う）と「堺市史」に見えているが、三味線は確に堺が始めてである。
小唄も亦然りである。元米小唄が民衆に親しまれたのは元禄時代であるが、堺は既にその先駆をなしていた。



せせらぎを消す手拍子の座がなみ	同	ジュース一本あけて手術の前夜祭	同
サボテンが主人みくびるよに枯れ	同	早台点されて気まずい事になり	山内 静水
スピッツに頬ずりキッスは許さ	永宗 宗義	どき廻り座長は女盛りなり	同
麦飯のスタミナ薪割りまだたしか	同	信念に生きて世間の風あたり	同
ふんふんと赤字の家計簿さかな	同	旅が好きルルも胃散もお供して	山川 勝子
入院三年を迎えて	同	信州の旅はスキーと狭く乗り	同
指折れば泣けて米そうで目をつ	同	大学生の留守番庭に草がのび	同
候補も候補も赤ン坊泣きに米	都倉 求女	ハイヒールに袴の姉も老けたもの	水谷 谷水
錢湯帰る下駄音 まろい臘月	同	預金しても出しても妻は淋しがり	同
春雨の中をこまめにロープウエー	同	中年の不敵な口説きかたもして	同
稜線に二人だけでよし雨の丘	同	種子粃を浸して一服うまいこと	三宅 ろ亭
酒の味古稀を働く腰にする	大久保 和三郎	保証人断るはずがないと来る	同
七十の未来を珠数で無理を云い	同	雑念を立ち切る心薪を割り	同
年寄りの機嫌番茶の味に居る	同	夫婦げんかに鍋のしじみ息を吸い	常岡 孝風
人間を疑い人間判が要り	同	ひばりなく声をかき消す排気音	同
お手伝いさんにこわごわ居ても	嶋野ひ呂し	寝るだけの所長公舎に犬が吠え	同
ためている噂せんべい布団干す	同	スタイルに合わせる柄と値が合	山本 素郎

高三隆達と云う堺宿院の顕本寺の住職は、当時の富豪高三家の出ではあるが、故あって還俗して復帰し、彼一流の小説を謳ひ出した生れつき、すぐれた人であったから自ら小唄をつくり、天性の美声で節おもしろく唄い一流をつくりあげた。

花が見たくは吉野へおりやれの吉野の花はいまが盛りじゃ

などと、小唄の取材は、よく時代語を折り込んで清新味を盛り、句法も自由で、庶民的な点に特色があった。世俗これを隆達節と云い、実に歌沢の始祖である。

茶聖千利休に至っては裏表千家の始祖である事は今さら云わずもがなである。しかし、敢えて言えば、利休は、異の豪族納屋の出で、その納屋助左エ門（呂宗助左エ門）の如きは、当時ルンペンに航し、大いに産をなした大貿易家であった。その邸宅は大安寺に寄附

車

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



ささやかな派閥へ猫もきて坐り	同	境内のはとで成り立つ店が出来	岡山縣	中柄のぶ子
マツチ出してる。にロンソン点 ^{りてくれ}	同	境内も遊ばせとかず駐車場	同	同
盆栽とちがいひねくれ売れ残り	大坂市	言い分は皆持つて居る敵味方	玉野市	小谷 仙山
大学病トコロ式高校に入れ	同	運が悪かったと人一人はね	同	同
停年は入歯のひびきが気にかかり	同	子に処世術解く己を諭す如	新島市	小林 孝正
マスコミに追われ税務署にも追 ^{われ}	徳島市	満開へしよんぼりしてる無一文	同	同
材料を聞いて料理をほめられる	同	金貯めてささえのようにとじこ ^り	新島市	安藤 桂仙
言訳の種もつきずに酔ってくる	バルアルト	無い袖は振れぬ相談持ちこまれ	同	同
「おけさ節」二世手拍子だけ合せ	同	せめてもの老いのお ^も のべレー帽	和泉市	末田 晃康
自分のものだがさわれぬ五月人形	伊丹市	飲め飲めと云うから酔えбай ^{やぐれ}	同	同
遠くなる明治を追いかける ^よ に生き	同	病棟の地理椅子車わかりかけ	竹原市	大洲大八洲
勤続は云うまい万年平社員	大坂市	悪銭で酔うて眠れば母の夢	同	同
平社員若く見られて有難し	同	電車スト長閑な春の朝になる	芦屋市	里田一十
中学がもうスタイルを気にしだし	堺市	敬老会々長として遺言し	同	同
買わない気セールスマンと小半日	同	夜に生き夜におびえる高架下	堺市	古川 静波
ハミンダの隣老いたる共稼ぎ	香川県	補聴器を外して借金断る気	同	同
半生を夷のらぬ恋にかじりつき	同	さればとて遺産を呉れる伯父も	大坂市	山田 蛙水

し、私の幼い頃の小学読本に「西工の苦心」と題して泉州堺に「国寺」と云う寺あり、今日西き給わん鶴の姿は斯くの如くなるべしと夜中見た画家の姿を心ならずも描が語ったので寺を辞したとか。箱根でよき校振りを見たので書き添えに帰って来たなどのエピソードのあのお寺であり、今東光氏の直木賞作品「お吟さん」に依ると、利休の母は大阪近在平野の末吉家の出であるとか書かれているが、末吉家は御朱印船末吉船を建造して、大いに南蛮貿易をなした豪族であり、利休の父は、今春の歌謡中から新たに一流を誦い宮尾流の一派を立てた宮尾道三の女であるので、千利休の家は堺の名家であったと云えよう。しかし、私は此等の人の残した功績や、その人の芸道を云っているのではない。

それよりも、秀吉の忌諱に触れ一家没落の前に居宅を大安寺に寄附した納屋助左門や天正十九年二月二十八日秀吉より死を賜って花を活け茶を点し自若として自刃した利休の平道が未く後世に残り、かえって死を命じた豊家が二代にして崩壊した事を思えば

芸術は短し
貧乏は長し

などと、云った或人は別として、矢張り、人生は短く、芸術は長し、田柳の道も亦末劫のものである事を知るべきでありお互に心に銘すべき事であると思う。



ビタミンを覚え料理は不味くなり	同	月賦屋の隣のバチンコ屋へ払い	尼崎市	大垣たもつ				
お隣はお隣納豆で飯にする	仙台市	平野 光道	同	学校の火事も予算に罪を被せ	笠岡市	谷本鈍愚坊		
汚職の家に幸福そうに大飼われ	同	交通禍させて境内散歩をし	岡山県	阿部 良江	同	常習の遅刻オメガを腕にはめ	大阪市	藤富 淀月
境内の掃除ほうきの目を通り	同	満ち足りた顔を別府の湯で洗い	笠岡市	佐内 隆文	同	おにぎりとしるこでねばる花の山	高知市	須藤 俊江
口下手が飲ませて食 ^む デイトの日	同	企みを抱きてジャズに歩を合わす	大阪市	北栲ひとし	同	集団就職安米節も稽古して	出雲市	中川 晃男
破れドラム叩け青春過ぎ易し	同	アベックの隣で一人旅の宿	大阪府	石田 新石	同	月賦販売に部外秘という値段	羽曳野市	中川 利男
建てる気で買うて野菜を作つて居	同	卒業の子等とは別な母の夢	松本市	松本 昌	同	やわ肌の三分通りを見せて春	河内長野市	森本黒天子
目に青葉肌に開け生ビール	神戸市	二浪目へもう葉桜となつちまい	川崎市	赤池 五朗	同	帯を解くごときに過去を追求し	石川縣	南 伝 一
合格欄穴のあくほど読み直し	兵庫県	思い出をたぐりよせてる春の海	貝塚市	千石 快人	同	出刃で断つ程固かりき恋の紐	岡山県	秋野 萩路
商売の都合あつての家族票	京都府	西村句楽坊	同	人様の倅せ見つめる不倅せ	愛媛市	手相見とぐるで漢菜荒稼ぎ	茨木市	高木繁太郎
						幸せは水筒の酒花の下	大阪市	和田 旋鳳
						二三斗は生ろうと下司の梅見客	福島縣	住吉 貞坊
						靴脱げば間借りも広い四疊半	玉島市	水粉 千翁
						長寿法教えた医者が先に死に	鳥取市	近藤 昭夫
						シネクリーム我が身励ます夢の味	岡山縣	梶川 信子
						のど元へ骨の立つよな酒を飲み	金沢市	根上 杏花
								村上 石峰

柳志寸言

大同小異

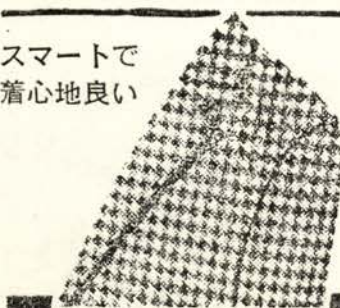
本多 柳志

大同小異。字引を見ますと「大部分が同じで少し異っている事」とあります。考えて見ますと私共の考えている事や、する事は大体が大同小異でありまして、そんなに異ってはいないのが普通の様であります。文章を書いてみほんの一寸した所のちがいで感じが大変

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り





片恋も楽し夢みるネックレス 西宮市 鶴飼 鮎子

あつのお茶いかがホステス如才^さ 宮崎市 野口卯之助

共稼ぎうちの節句は日延べされ 兵庫縣 藤井雅佐女

ユニホームの白鮮かな新学期 大坂市 宮尾あいき

花蓆夫の酒に惚れ直し 今治市 八塚三五島

人情に負けて戻った日の孤独 玉島市 井上 旭峯

女手でよくぞと云われ涙ぐむ 堺市 福島美津子

金 泥 集

麻生 葭乃 選

「境内」

境内に墓の油も出る祭阿茶

おみくじは大吉境内誰も居ず 同

境内に土俵を造る旅まわり 同

境内で昨日の顔と今日も会い 一栄

境内をモータープールに改造し 同

境内の桜に曳かれお詣りし 同

境内に先祖があげた石燈籠 同

境内の場になつかれ豆を買い 同

境内にサクラを使う店も出る 同

部屋貸しにして境内は支えられ 花 梢

書割りの境内梅が真盛り 同

境内へ老の日課の乳母車 同

境内で尼僧に会えば黙礼し 清 子

八重桜今日は序のお賽銭 同

尼寺の桜しづかに散っていた 同

境内で一段飛びをして遊び 美 喜

境内の静けさ吾を取りもどし 同

境内をモータープールで稼いで居 同

境内の小砂利に困るハイヒール 同

境内を安全地帯と遊ばせる 同

境内の桜は酒へ遠く咲き きた子

境内を出た大吉は歌になり 春 栄

大祭も済んで鳥居の春の雨 同

境内へ礼を言う人願う人 同

色つけがちと久に喰わぬ五色豆 西 宮 宮本佳以子

離段ほめて白酒にありつけり 奈良縣 木村よしを

ユニホームに住み文化人らしい口を^く 大坂市 銭谷かおり

慰霊祭忘れた愛児に又涙 市振市 古谷まさる

負けられぬファイト野望にみ^み顔 松江市 岡崎 祥月

もう一人の僕を殺して対談し 遠野市 鈴木 二文

境内へはいればスリも手を合せ 岡 甫

昼からも又境内へ孫を連れ 同

境内で弁当開くよい日和 同

縁結びした境内で別れて米 酔 夢

境内でおつたが泣いた様に泣き 同

境内に世俗の匂い小屋が建ち 同

拝観料として境内掃き清め カネ女

花いっぱい咲いて境内誰も来ず 同

境内の赤い袴も爪をそめ 美 代

境内の寄附の番づけ気にくわぬ 同

御命日此の境内もせまくなり みき子

本堂も入れてスケッチ出来上り 同

境内で香具師赤けつとう敷きはじめ 寿美司

境内におつたのような二人連れ 同

敗戦の境内子供に荒されて 勝 子

次回題「白髪」メ切六末日

に違つて来るのであります。絵を書いてもほんの一寸した所へうまい先生が筆を入れると其の絵が生きて来ますし、私などがほんの一寸いじると死んでしまうのであります。

大同小異でも大部分が同じであるとは云えない様でありまして、実はこの小異にこそ私は大きな意味が、かくされているのではないかと思います。

米洗う前にはたるが二つ三つ
米洗う前にはたるが二つ三つ
米洗う前へはたるが二つ三つ

斯うならべて見ますと外観的には何れも大同小異であります、其の内容になると小異どころではありません。

私は白柳さんの入門講座をいつも面白く有益に拝見しているのがあります。白柳さんがほんの一字か二字を直しておられるのでありますが、其のツボをヒタリと押さえておられる丈に其の結果の感じが決して小異ではありません。一字か二字のほんの一寸したちがいで没句も名句になり得るのであります、私なども一日も早くこの「大同の中の小異が本当にわかる」作家になりたいものだと思がけている次第であります。

実篤が描けば南瓜も五千円

句評

リレー



明 宵 原 月
庫 文 野 長
晃 川 西
秋 田 菱
名 古 屋 市

返事も書かぬ程自分の心が
恐く 水 客

宵明「このような句評は苦手だ。自分が別の自分を眺め、あきれている自嘲に似た句と思うが、自己満足が度を過ぎると独りよがりとなる。句意は普通常識を以ている人が想像しうる程度のものでなければいけないと思う。異色作家として尊敬する作者であるが……、川柳と名付けた短文のようだ。」

文庫「私は簡潔、含蓄、詩趣を尊重するのだが、この句は含蓄はあるが簡潔でなく詩趣に乏しいようだ。大体平明に表現出来るものをわざわざ分り難く云っているようにさえ感じるのである。特に「返事」に個性がない。往復ハガキの返事か、返信用封筒入りの返事か質問か詰問か要求か愚問か詰問かとに角今一步の磨きが必要だと思う。」

晃「宵明氏の批評も、文庫氏の批評も一応は尤もだと思うが、これが総てではない。『ペンキ屋が一番大衆向に描き』の遠二氏の句が暗示しているように、大衆性と芸術性は必ずしも一致するものではなく、現代の複雑な人間心理を表現しようとすれば、時に難解になり独りよがりと評せられる句になることも又避けられぬと思う。此の句が表現しているものは自嘲ではなくて、理性と感情の相剋だと私は思う。そして他人がど

う解釈しようと、この表現が作者の真実なのだと推察する。短文のようであっても、内面からにじみでたりリズムがある。然し文庫氏が指摘されたのと少し違った意味で、前半に難があり、佳作とは言えないと思う。」

満秋「晃氏の云う通り宵明氏や文庫氏の云う評は当たっていると思う。私は川柳家であるから作者の気持はよく判る。しかし真に批判を仰ぐべき大衆には判らないのではなからうか。返事は何の返事であつてもよからうし、破調の中にリズムは感じさせるし、うまく纏めてはあるが具体性に乏しい点を今一度推敲してみるべきではなからうか。」

宵明「晃さんの説明では大衆性と芸術性なるものと挙げられている。作者は初めから二つの傾向を意識しての作品でなくその構図、着想、心算、表現等がそのような型になったに過ぎないので大衆性と芸術性は区別すべきもので無く大衆性の中に芸術性があり、芸術性の中に大衆性があり得べきと愚考します。理性と感情の相剋は正しいと思いますが、であるから文章の一部分のような表現でよい。出しぬげに断面撮影の一まいを見たような感じがします。とにかく不勉強で作者に対し失礼をわびる。」

文庫「句評は文字通り「句評」で、それ（句評）を読ませることが

目的である。つまり顔の美醜を問うのではなく「その顔かたちをどう読みとるか」が狙いであろう。その意味ではこの句を特に取り上げて論じさせようとするものと思うが、私にはこの顔が複雑すぎてその表情が読みとれないのである。晃氏の評で「そんな風に解釈するものかな」と感じた次第であるが、結局作者の狙っているところが分らないのである。」

晃「満秋氏は私が宵明文庫両氏の評に同調したように受取っているようだが、実はそうでない。私が「一応は尤もだと思う」といったのは、ごく一般的に解するとそのような批評になるだろうという気持ちで、私自身は大衆の総てに判る句を、常につくらねばならぬとは思っていない。満秋氏は「私共は川柳家であるから作者の気持は良く判る」と言われたが、此の句の作者としては、それで充分なので強いて大衆に媚びる必要はないと思っていられるものと推察する。大衆性と芸術性の問題は、問題が大きすぎるので今は触れない。具体性に乏しいという批評は、自分の心が怖い」という異常なまでに深刻な心の表現をするのに、『返事も書かぬ』という事実が余りに軽く不自然だと感じられたのであろうと思うが、然しそれは人の性格によるので、作者にとって返事を書かぬという事は、よくよくの重大事なのであ

う。目的である。つまり顔の美醜を問うのではなく「その顔かたちをどう読みとるか」が狙いであろう。その意味ではこの句を特に取り上げて論じさせようとするものと思うが、私にはこの顔が複雑すぎてその表情が読みとれないのである。晃氏の評で「そんな風に解釈するものかな」と感じた次第であるが、結局作者の狙っているところが分らないのである。」

う。

ハガキ一枚ずつ何か書く生き
甲斐 梅 志

此の句と二つ並べると作者の心境がよく判るのではないかとと思う。ただ「書かぬ程」の「程」が説明的で此の句の価値を減じたと思う。

満秋「何度読み直しても、判るような気がしなからはずきりとは判り難い句だ。晃氏の云う通り大衆に媚びて川柳を作る必要はない。しかし大衆に判らない句に芸術性を見出すことはむづかしいのではないかと思っている。」

金魚悠々娘の失恋など知ら
ず 七面山

宵明「金魚鉢に映える金魚の華麗な幸福感に対して失恋した娘の深刻さをより以上に感銘させようとするものであるが、着想は陳腐の域を脱せず。手法としても平易で七面山さんらしいパンチが利いていない。」

文庫「どういふところを狙っているのかその目標が分らない。文字に現れただけで考えると「若い女の失恋など素知らん顔で金魚が悠々」と泳いでいる」とだけしか察せられないがそれ以上のことに思いが及ばないのは作品が平凡な上従来こんな風の句が無かったためと思う。これを身辺句として「金魚悠々わが失意など知らず」なら分らぬでないが「娘の失恋」では平凡でそこらにごろごろしている句

である。

見—前評者達の批評につけ加へることばがない。七面山氏の作品としては安直で、作意の底が見えるようで、感銘が薄い。満秋大兄は如何。

満秋—晃氏に如何と云われるとつらい。何とか批評めいたことを云いたいと思つて、金魚と娘の失恋の関連性に就いて種々考えてみた。娘の飼っている金魚。失恋にうちひしがれた娘に對し常に華麗な衣裳を纏つて悠々泳ぐ金魚。作者の云わんとすることは判らぬでもない。しかし、何故金魚でなければならぬか、何故失恋でなければならぬか、結局私には判らなかつた。諸先輩の評に反論する材料は殆どない。

宵明—二度目回読と川柳雑誌三月号が一緒に届き「句評リレー」に七面山さんが紫光さんの「金魚と一家心中」の句を評して「昨日の検事は今日の被告となつてゐるのに驚いた（三月号の評は仲々活潑だ）」

「失恋娘と金魚」の対照が人をしどこのような感銘を与えるか。その点数の問題だ。

文庫—要するにありふれた句で読者の心の琴線にふれるものが無い。人間で云へば中肉中背で特長の無いありふれた平凡人の姿しかうつらない。私なら「父悠々」とし度い。

見—四面楚歌といった状態の作

者には気の毒だが、ついでに言つておく三月号で作者が

金魚だけ一家心中へ生き残り

紫光

の句を酷評して「金魚から受けるイメージが富、一家心中から受ける感じは貧で、此の貧と富の對象が句のバランスをとっているのがいけないおよそ川柳というものはアンバランスの世界にその良さがあつたのではなからうか」と結んでおられたが、その筆法でいくと「金魚と失恋娘」は、受ける感じは共に富で、これはアンバランスだから川柳としての良さがあるという理屈になるらしい。私の考えでは、このバランスのとり方は全く逆で、七面山氏は八詩における不条理性という何を何か誤解していられるのではないかと思はれる。

夫へのかたみ子供と洗濯機

花村

宵明—ひしひしと切ない亡妻への謝恩と思慕が覗われる共感の句です。えたみの子供と洗濯機からして遊び盛りの子供と思ふ。母誓りである今後の苦難と、子供の苦勞を思ふは暗然とする。妻の化身でもあるような洗濯機を下五に置いたことが一層慕情を深くさせたのである。

文庫—申し分ない名句である。

見—もし私が作者であれば、とても此のように冷静な表現はできないであらう。自分の悲しみをむきだしにして、思い切り味嘆の句

をつくるか、或いは感情に負けて、句にならないかどちらかである。此の句は事実をして真実を語らしめるといふ非情の句であるが、悲しみを言わずして読者に、測々と悲しみを伝える。読者が、作者の境遇を知つていればこの哀感が二重三重になってひびいてくる。此の句は読者の感じに訴える句ではなくて、読者の判断力や想像力を要求する句である。

満秋—先ずユーモアを感じさせて後、哀感をそそる、川柳的な川柳と云うべきか。洗濯機を材料にした事は既に都會では普及し尽したと思える洗濯機、今更かたみに洗濯機でもなさそうだが子供と洗濯機しか残せない生活程度。この老いたいたずら盛りの子供を何人か抱え途方にくれる男に、亡き妻はよいものを残したものだ。この洗濯機を使う度に男は最愛の妻を想い、周囲からすすめられる再婚の話に耳をかたむけようとはしないだらう。ただ客観的に詠まず、主観的立場から詠ったとき、感じももう少し変わってくるのではなからうか。

宵明—満秋さんの言われる通りこの句から洗濯機を通しての生活程度が判るようだ。晃さんは、「自分にはとてもこのような冷静な表現は出来ぬ」と言われたがたしかにこの句非情であり、残された夫自身の句ではないようだ。極く手近な第三者が最大の同情を傾けて作つたものと思われて来

た。

哀嘆は何んと言つても子供であり妻に関連性を感ぜしめるものは洗濯機としたものだ、主観と客観で大きく変つて来ましたが、私の判定も迷つて来ようです。三者の御意見をどう。

文庫—切々胸をうつ句で只敬服するだけであります。尚私はこの句はまことに明るさがにじみ出ていると思います。

見—前の評で、私が「自分にはとてもこのような冷静な表現はできぬ」といったのは私にはそれだけの表現能力がないという意味であることを申添えておく。私はこの句はあくまでも作者自身の身辺を詠つたもので、感傷に溺れずに、ここまで非情に表現された作者の川柳魂に敬意を表したい。この句は満秋氏が「ユーモアを感じる」といい、文庫氏が「明るさがにじみ出ている」と評せられるような面があるが、それは表現方法の問題で、これは川柳独自のものかも知れない。その意味で川柳的な川柳といはれた満秋氏のことは、もうなすける。

「滑稽も人間の深いところから発するときは忽ちにして悲愴なものとなる」というアナトール・フランスの言葉は、正にこの句の場合にあてはまるようだ。

信じる人を持たず淋しいメ

ーキャップ

一瓢

宵明—メーキャップする人は普

通の女性でない特殊な職業を持つ女性と解したい。「信じる人を持たず」嘘と金に明け暮れる社会を思ひし淋しいければ淋しい程世間に面當ての激しいきついメーキャップとなつて現われるのであらううつろなる種の女の心理をメーキャップに寄せた面白い句だ。

文庫—「信する人」がこの句の場合適切かどうか。これで無ければならないかどうかである。この場合「信する人」が他人でなく「自己」であつた方が面白いのである。

見—作者には水商売の女を詠んだ句が多い。この句も恐らく宵明氏の評のごとくであらう。そうであるとするれば、際立つて個性的な作家である一瓢氏の作品としては、内容があまりすぎると思う。私はこの句を、こう鑑賞したい。「メーキャップ」は、特殊な職業の女性をのみ言つたものではなく、一人の人間が現代に生きていくための止むなき偽装であり、作者は現代に生きるものの人間不信と、生活（生存）するための虚偽を諷したものであらうと。

満秋—この句が晃氏の言われるようにあますぎるとなれば、「淋しい」と心境を説明しているからではなからうか。この「淋しい」が句の余韻を消してしまつていような気がする。この句のメーキャップは確かに濃いきつもの想像すべきだが、淋しいをメーキャップの形容詞と考える時、安

物の化粧品のうちには上げたものゝ想像される難点を持たないだろうが、もっと適切な語があると思ふ。

宵明「信じる人を持たず」で私は特殊な職業の人と断定したが、晃さんの説によつて特殊な人達も含んだ女性の生きぬくための偽装とも言えるようだ。而し私は「メーキャップ」の響きがピンとある社会の女性と直感した。その場合「淋しい」は蛇足のようにでならない。「淋しい」はむしろ嘘の世を嘲笑う反逆性を消している。この「淋しい」そのまま受取れば晃説に傾いてくる。いや矢つ張りこの場合どきつい夜の女であつてはし。

文庫―諸氏の評を読んでやつと自分の目が開けられた次第でお恥かしいがよく読んでみるとこの句「信する人」に十分ウエイトがあり、ぐいぐい心に食い込んで来る。このメーキャップの主は宵明氏説の通り職業婦人と解し度い。長唄に「誰に見しようとして紅かねつけよぞ、みんな主への心中立」と云う文句があるが、こうしたこととまで連想される深味ある近代川柳と改めて感心する次第で最初の読み誤りを訂正します。

晃「淋しい」をメーキャップの形容詞としてはいけなないだろうと思う。これは一句全体に通じる主人公の気持なので、「信じる人を持たぬ」事にもつながっている。然しこのように「淋しい」と言つてしまふ事によつて句の余韻をなくした事は確かである。此の句の主人公を、夜の女と解されても私はことさらにそれに異議を唱

える気持はない。ただその場合でも、此の句の底に人間不信の念を持ち、生きるための偽装を余儀なくされている作者自身がひそんでいゝるのなれば、句の価値は低くように私は思ふ。

満秋―諸説の通り「淋しい」に難点があるという他にいうべきこともないが、句想としては取上げのべきものを持つてゐると思へないありふれたものだ。句会の席上にも作られたものではなからうか。私ならうっかり天位にでも抜きそうな句だ。

一寸地味女史でゆく日に着るとしよう 阿茶

宵明―女として生きる時と女史として活動する場合をたて分けたせんさいな女の心遣いを詠んだものかと思う。「一寸地味」に氣にかかるとあるが「着る」としてうに迷つた結果決めた着物に対する女の気持とその女史の面影が浮んで来るようである。

文庫―軽く言い放つていて而もぐつと迫つて来る力がある「この着物は年令に相応わくくないがこんなときにはこの位のものが適当だらう」と衣装に氣をつかう女心が読みとれる。

晃―何の気取りも、ケレン味もなく、作者の、その時の気持をさつと出したような句である。芸術がかった、苦惱に満ちた力作をものしようなどという子供っぽい野心は更になく、心から川柳を楽しんでいられる事が此の句からも察せられる。深みはないが誰にも共感の得られる佳作である。一部の人達（私もその中の一人かも知

れぬが……）のように、複雑な現代生活の中に生きる、苦渋に満ちた現代人を個性的に詠い上げようとするのは、川柳のような短詩型では非常に困難なことのようにだ。

満秋―一方で女史と呼ばれる身であることを自認しながらその知性と教養がぜんぜん邪麗しないのは、作者の綴め方にかかつてゐる。現代川柳の佳句とも言えよう。評とは別に晃氏の説に納得しかねるものがある。というのは現代に生きる私共が現代人を詠みあけるのが川柳作家としての使命ではなからうか。ただ現代人が苦渋に満ちてゐると断定するのは早計で、各人各様の現代の生活に対する考えがあり、それが個性的な句を作つていくのではなからうか。この作者の何の飾り気もない詠みかたが作者の個性であり、この句の場合成功している。

宵明―諸説の通りで何の飾り気もなく実際そのまゝをサツリと詠んだのがこの句の命で句から迫力や魅力が求められず所謂難のない句と言いたい。

個性の問題は前二者の説にどちらにも一理がある。十七字に個性、社会、生活、時代、を参み出させる困難を打開してゆく勇氣と努力を今の川柳作家の使命として肝に銘じたい。

晃「現代に生きる私共が……」という満秋氏のことは異議はない。ただ私は、複雑な現代社会の機構や、その中で生活する人間を、十七字で表現することは実にむずかしいという事を言つて

いるだけだ。なお、此の句に個性がないなどと言つた覚えはない。私も佳作だと認めていた筈だ。だが然し、こ

れを現代川柳の佳作として、無条件に讃美することに躊躇する。我が目の目標はほんのちよつとした瞬間の軽い感情を、素朴に表現しただけのものであつていいものだらうか？ もつと心の奥底を、つきぬけて内部から噴き出したものでなければ、ほんとうに現代川柳の佳作といふ疑問が言はずもなの発言になったことを察してほしい。現代を「苦悩に満ちてゐる」と言つたのは私の独断で、これは訂正させてもらふ。最後に、此の句評リーターの評者である先輩各位の謙虚さに甘えて、無遠慮に発言したこととを深くお詫びします。

満秋―晃氏の「心の奥底をつきぬけて内部から噴き出したもの」という説に同意。最近、これはと膝を打つような句にお目にかかれな思ふ。要求するものが過大すぎるうか。担当 真鍋一瓢

続 川柳書架

(29)

孤独地蔵

川上三太郎著

★本書は、二千五百句の堂々たる句集で、巻頭には著者の近影が掲げられてゐる。

★目次を挙げると、蒼蒼亭句箋一さくらの芽だ・はだかになる・良妻で賢母で・わが眼は空を・二百四十本・交番に番地が・使えぬ紙幣・冬空をびりり・花嫁の自動車・一月日日好日・さくらさくら・名古屋も今

は・声すれすれに・吊革を両手に・長女も次女も・あけ潮の下駄・バジャマ着て・たらちねの鏡・むかしむかし・名人のかひなき子は母を呼ぶ・はさんで残る・東京湾は鉛色・母の氣を知る・溝がまたげぬ・手の小ささよ・白牡丹と白猫・高いゴム風船・火元はひとり・今夜のまどろみ・口まげさせて・用なきまよの・すくも妻の名一本の葦より・あなだの青春・ひらひらの春の・だんだん黙く・孤独地蔵・緑雨点滴・孤独地蔵・冬酒・酒酒酒酒酒・句の道・母子富士・白魚菩薩・やきふな・黒鵜・雨を降る・秋・あんなう・江東かきさき橋・象象・冬の石・はせいちか・続凍酒・子らの子生る・音知子守唄・河童薙月・炎天河童・ルムバ河童・河童豆腐・雪の周奏曲・一匹狼

★「あとかぎ」の一項を抜すいうとこの句集は二つの部分で成り立つてゐる。「蒼蒼亭句箋」は江戸川柳の伝統を受けとつて、その行かんとした道を追ひ、その求めた道を拓こうとしている現在の川柳のあらかたの句柄である。「孤独地蔵」はそれとは別な、従来の江戸川柳の求めることが出来なつた（徳川文学の大部分はそうであつた）一個を主軸とした回廊をこゝろみた。これはあたしの二十歳前後からの野心であつたが當時は異端者と罵られ、外道と罵われた。その野心は今でもあつたが、野心的ではどうにもならぬ。老いと力のおとろえをひとしと感ずる。いまは年輪に即した句が書きたい。云々。

★昭和参拾八年四月拾五日発行。B5版、四五五頁。東京都中野区川添町二拾九番地川柳研究発行。★著者は「川柳研究」を主宰。

特集

雨の思い出

を語る諸家



詫しいかった

春雨

山川 阿茶

日和小町? と云うニッケネー
ムがある位で遠出して雨にあった
経験は少いのですが、団体旅行と
なると精進の悪い人のそば杖を喰
って降られた経験がないでもあり
ません。

或る秋医師会で比叡山ヘドライ
ブした事がありました。いつも行
った事はないのですが、ドライブ
ウェイが出来たし、覽でもゆける
のだし頂上の眺が百万弗だとす
められて、重いお尻を上げたので
したが朝からの雨。雨の京都で昼
食をすませ一路叡山へむかって登
って行ったのですが、ただ山を縦
ってバスが走るだけ、車掌さんは
お天気だったら砂ぼこりで大変な
んですよと慰めてはくれるのです
が頂上に着いても雨はやまず見晴

らしはきかず

あの辺が琵琶湖かいなと雨
に立ち

阿茶

です。折角来たのだから肺の洗濯
でもしてと深呼吸をし、知恵を預
いて帰ろうと文珠楼へ石段をあ
えぎながら上って、賽銭の割には
欲なお願いをして裏へまわれば平
坦な道があった。裏から来れば来
々と参詣出来たのに。

裏道を知らず石段上って来

阿茶

正直者が馬鹿を見たいい標本であ
る。

あれからもう四十年近くなるで
しょう。五月の末の日曜日、雨の
午後を箕面へ河鹿をききに行った
事がありました。芽出し紅葉の色
とりどり美しい緑の雨がしたたる
よう。秋の紅葉の頃はあれだけ賑
わうのにこの芽出しの美しさ、河
鹿の美しい声をききに来る人のな
いのが不思議でした。雨のせいか

とも思いましたが京都の高雄へ行

った時も芽出しの頃は人影が無か
ったようでした。今ならハイキン
グでこんな事はないかもしれませ
ん。あのグループで残っているの
は私一人だけ、憎まれ者が世には
ばかっているらしい。

冥土行きオミットされて句
を作り

阿茶

忘れもせぬ昭和二十年三月十四
日に焼け出され東横堀の花房と云
う旅館に一時落ちついたが爆撃さ
れた日から二日目か三日目に雨が
降った。住む我が家はなし、着た
きり袋、懷中に金はあっても傘一
本ままにならぬ統制時代、喜の字
をすぎた雨と途方にくれたたあ
の雨の日の事、あれでも春雨であ
ったはずノーマア、ノーマアであ
る。

雨

阿茶

とつおいつ溜息できく春の

置炬燵やらずの雨が降りし
きり

阿茶

来るかしら来ないかしらと雨を
きき

とそのようなロマンチックな雨の
思い出が一生に一つや二つあって
もいいはずではないかしら。

サーカスの町へ

じゅつくり

雨が降る

野村 味平

福井県吉崎のご坊の運如忌が、
そろそろ終ろうとする四月末にな
ると、ここで興行していたサーカ
スが、私の町に来て小屋掛けを終
る頃である。弁財天の境内一っぱ
いにテントが張られるともう童心
がわくわくするのだった。どうか
して興行が予定地の都合で、秋ま
で延期されて小屋の掛からないそ
の春はチンタの甘い旋律を思い浮
べて私達は淋しがるのだった。今
も毎年ではないが、吉崎のご坊を
打ち上げて来たサーカスがこの境
内で一週間余りの日数ではある
が、奏でるチンタは浮き浮きした
気分を醸して華々しく開演するの
だった。光郎さんの住居の丁度裏
側にこの境内が当たっているの
で、同家の茶の間に居てもチンタの
音がよく聴きとれて、うずくよう
に童心をよみがえらせて呉れるの
だった。そしてこの頃になるととき

つく雨の日が多くてテントはべた
べたに濡れて団員の時化している日
もあった。何時の句会であった
か、チンタの流れる雰囲気は久雄
さんが川柳したいものとさ苦吟し
ていたことだった。

サーカスの小屋へ時雨がしき
り

玲人

テント村ポスターに無い雨が降
り

春 渠

とゆがないので雨が奏でたドレ
ミハソ

幽王

或る年の春、Sサーカス団が、
この境内で興行した初日のパレ
ードの当日だった。当地の高等学
校で教鞭を執っていた八次島出身
のO教師は、パレードの華やかな一
行を眺めていたが、ハッと顔色を
変えて深い溜息を漏すのだった。

白柳

少女時代に誘拐せられた実姉が消
息を絶つてから三十年は経過して
はいるが、もしやサーカス団近
に誘拐されているのではないかと、
転勤ことは各地方のサーカス
の興行を見て廻ったのだったが、
今、その探し求めている実姉に生
き写しの団員がいるではないか、
白粉やけをして、女らしさも失
せてはいるが、じっと見つめている
O教師からやがてパレードの一行
は離れて行くのだった。はっとし
たO教師が、翌日Sサーカスの見
物人の中に紛れ込んで目当ての演
技者をゆつくり観察したことは言

うまでもない、ここで三十年の水
い日数を探し求めて来た実姉と会
合の出来た劇的な場面とはなっ
たのだ。だが今は身も心もサーカ
スに溶け込んで、すでに幹部団員
の女房として母親となって暮して
いる実姉を連れ戻す術はないのだ
った。

撚り戻す話の窓へ雨が降る

湧三

春雨も乙なものだが屋根が

万古

心の奥へボンボンと雨

水客

病人も寝て居れぬほど雨が

日満

すっかり諦め切ったO教師は、

今のままのサーカスの生活が実姉
にとつては、どんなにか幸せそう
でもあると思えたので、軽しい気
持で別れて来るのだったが、後
日、私の友人がこの実話をテーマ
にして一篇を創作したのだった。
これを文芸春秋か新潮かに掲載す
るつもりでいたのが、この道もな
かなか険しくて、折角の力作で
ありながらついに惜しくも日の目
を見ず仕舞で、彼も、東京から戻
って教師となったのだったが、当
地のこの高等学校へ赴任して一教
師となって停年退職して終った。

雨の宿山を眺めるばかりな

緑雨

俄雨木の下蔭もぬれて来た

霞乃

夕立が晴れてお寺の冷やっ
こ 全

御苦勞さんと云いたい雨の

田植見る 全

ありがたい雨なり稲の風も
吹き 全

田植も始って、雨の降る季節
が、また、やって来た。どこかの
ステレオが島倉千代子の「わたし
にあなたに雨がふる」の歌謡を流
して呉れている。しんみりした気持
で雨を味ったことだった。

雨の思出

橘高薫風子

乱れ髪式部の世より恋は憂き

薫

私が初めて川柳を創ったのは、
「乱れ髪」という題で、昭和三十
年の一月か二月か、冷たい雨の降
る日であったと記憶する。二十九
年の十二月初旬に明和病院へ入院
した私は、その翌朝こぼれと真
紅な生臭い血を吐いた。

胸の中に混沌として固まらぬ沼
のようなものがあって、それをい
たわりたわり療養生活をしてい
た、いわば人生の最も暗い雨の日
だった。私は、川柳を始めた時
を、公けには、蕙風子と改号して
川柳雑誌の近作柳欄に投句を始
めた昭和三十一年三月からだとし
ているが、約一年足らずの期間、
中断はしながらも、にやにやとし

た傍観者的な態度で作句した時代
があった。私の入院と相前後し
て、片山鏡水という俳句をも川柳
をも手掛けるやや若吟型の作家
が入院して来られた。ベットの
隣だったので俳句の入門書などを
見せて貰ったりしていたが、正月
の或る日、鏡水さんは病院内の青
蛙川柳会（川維明和病院支部の
前身）の新春句会で天位を獲得さ
れ、賞として菓子器を買って来ら
れた。私は、その日、その安物く
さい菓子器がとて豪華に見えて
仕様がなかった。鏡水さんが練り
に練って創られた句が選者に認め
られ、最高位になったそのことは
作家としてのよろこびや満足が大
仰に私にまで伝わって来て羨まし
く感じただけでなく、療養生活を
ひくくするめた人生の中でも、何
か高い価値を持つ語りあるものの
ように思えた。それで翌二月句会
の題から作句し出したのだったが
句会には顔を出さず投句だけを続
けていた。私は苦吟型の鏡水さん
から創作の苦しみや喜びを、いち
はやく深く教えられたが、その熱
気の籠った真摯な作句態度は後々
私の作句への心構えに好影響を与
えてくれた。川柳生活ようやく八
年、句会での兼席題にも慣れてな
おさりな作句に情した自分を顧み
て恥かしい思いをしている。私が
初めて句会に出席したのは、青蛙
川柳会、阪神電鉄の川柳教室、角
一ゴムの白鷺川柳会の合同句会が

病院の講堂で開催され、水谷鮎
美、須崎豆秋、長谷川三司、榎南
夏六の諸氏が見え、選者として選
をされた時で、今にして思えば、
錚々たる大先輩が揃われた句会だ
った訳だが、当時の私は、豆秋さ
んがすばらしい作家の一人である
ことさえ知らぬ無関心ぶりであっ
た。その句会の鮎美先生選で、
祇園まだ寝ている京の雨の
朝

という句が天位に入賞した。題が
「京の雨」というのだったので、こ
れも雨に因縁があるわけだ。初め
ての天位の句なので私には捨て難
い句になっている。三十年の十月
か十一月かであった。

雨四題

傍島静馬

夜桜の雨はしとしと降って
良し 紫香

大正末期から昭和のはじめにか
けて、あの頃はとてつと暢気だっ
た、人々は穏やかだったし、さほ
どあくせくせずとも商売は気楽に
出来たし、漸やく茶屋遊びも面白
くなって来た年齢だし。その頃花

見と云えば京都の円山公園あた
り、遊びと云えば祇園と勝手に決
めて、土曜日から日曜にかけてよく
出かけたものだ、三昧にも飽いて
おんなの勧めるままに、小雨降る
中を近くの円山公園の夜桜見物に
出かけたことがあったが、いまか

病院の講堂で開催され、水谷鮎
美、須崎豆秋、長谷川三司、榎南
夏六の諸氏が見え、選者として選
をされた時で、今にして思えば、
錚々たる大先輩が揃われた句会だ
った訳だが、当時の私は、豆秋さ
んがすばらしい作家の一人である
ことさえ知らぬ無関心ぶりであっ
た。その句会の鮎美先生選で、
祇園まだ寝ている京の雨の
朝

という句が天位に入賞した。題が
「京の雨」というのだったので、こ
れも雨に因縁があるわけだ。初め
ての天位の句なので私には捨て難
い句になっている。三十年の十月
か十一月かであった。

ら思えば当時夜桜観賞といった風流気があったわけではなくただ好きなおんなと一緒に歩きたかっただけのことらしい。だがあの頃から三十年余、いまならゆつたりした気分でも静かに雨の夜桜を観賞することが出来るだろうと思うのだが、わざわざ一人で出かけるのも億劫だし、それよりも残念なことには、当時のように情緒豊かなおんなのいないことだ。

「苦勞さんと言いたい雨の田植見る 霞乃

若い頃、故郷へ帰る汽車の窓から、そして田圃道を走る人力車の幌の中から、雨もいとわず泥にまみれていっしんに苗を植えているお百姓さん方の素朴な姿を眺めて、心から感謝をこめて「苦勞さん」と口の中で云ったものです。いまでも田植時には到る処でこの情景に接しますが、若い頃に受けた感銘とは大ぶん異なったものになりました。勿論世界大戦という大きなギャップはありましたが、あの当時食糧に困っていたわれわれに對するお百姓さんの態度は、私の知っている限りでは、とても横柄でがめつものでした、以来われわれがむかしから知っていた、あの純朴そのもののようなお百姓さんは姿を消してしまっただけではないかと思うようになりました。いまや農家も鉄筋構え、仕事は機械化されるご時世、もうむかしのように、有難い気持ちで田植を見る

ことが出来ないのは、如何にも淋しい気がします。

「俄雨ジヨッキ一つで待つつもり 路郎

家へ帰るにはまだ早い久しぶりで南をぶらつくつもりで社を出たが途中で夕立に出あった、しばらくアーケードの下をうろうろしていたが止みそうにもないので、近くのビヤホールへ飛び込んだ、注文した中ジョッキを、ながいことがかってほちち飲んだつもりが、いつの間にかコップは空になっていて、雨はいつこうに止まず雷さえ鳴っている。周囲のテーブルは追いかけて混んで来た。空ののこぼれでいつまでもねばってゐるわけにもいかないの、こんどは思い切って大ジョッキを注文した、これで大ぶん時間を稼ぐつもりだったが、根がいの口なので飲み出すいつもの調子が出て来てこれもすぐに空になった、そして三杯目はさも当然のように何んのためにもなく注文してしまつた、空き腹にあおったビールの酔いが廻ってきた頃には、雨も家のこともすっかり忘れてしまつていた。

「お詣りが映画にかわる雨と 静馬

梅雨空を気にしながら清荒神への月詣り珍らしく末っ娘と一緒に行くという、阪急普屋川から電車に乗るまでは何んともなかったのだが、乗換の西宮北口へおりたこ

ろぼつりぼつり降り出して来た、電車を一台やり過して暫く様子を眺めていたがどうやら本降りらしく止みそうにもない。自分はお詣りを諦めて帰るつもりだったが、娘は折角出て来たんだから何処かへ行こうと帰りがらない、やむなく方角違いの大坂へ出ることにした、梅田に着いてとりあえず阪急百貨店にはいったが、別に買物のあてがあるわけでもなく店内をぶらついているうち、ふと娘が思い出したように映画を見ようと云い出した、自分にはさほど興味がなかったのだが、娘の気持を察して云うがままに北野劇場へはいってしまった。思えばとんだ神詣りになってしまったが、結局娘にはこの方が良かったのではないかと苦笑を禁じ得なかった。

雨もまたたのし

児島与呂志

「さしかける方が濡れる春の雨」 与呂志

雨を匂にする場合の雨はなんとなく悲しい匂になる様である、けれどその心は美しい雨さしい雨たのしい雨等々雨のいろどりを作句される様である、けれどその雨も長くつづく

「よう降るなよう降りまんな といやがられ」 与呂志
いやがられる雨も降って貰わ

ねば困るものと知りながらその勝手な気持はほどほどと云う処を望むのが人間の我の強さであろう。それが知らぬ間に自分達の生活に結びつく事に迄及ぶ事において、そんな、ちゃんぽんの心にすもんだ、本当の芯底迄も考えて見たいものであると思う。それはそれとして私は雨を好きだと云える種々の思い出を持ち今またのしんでいるのである。私と妻の恋愛の内でもっとも私の心を妻のやさしい心で取らえたものが

「さしかける傘へ信じ切る瞳がせまり」 与呂志

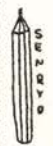
私と彼女がほん心安く車掌と事務員の（今の言葉ではB Gと云えるかな）付き合っていた時に（くわしくは昭和二十三年、頃は春から時雨にかけて）雨をさけての帰りがけの私を待って送って呉れた、二人は只無言であつても二人の心と心にはいつしか恋と云うには惜しいような信じ合える二人であつたなと私は思い出の一ページとし心の奥底に秘めているのである。

「もう一台もう一台と雨に待ち」 与呂志

これは待ち合いの時の句では無いのである、私の勤務終了後の帰宅時間を停留場で待つ妻の姿である。私達電車乗務員位時間の差はげしい職業は恐らく他に無いのでは無からうか、早い時には午前九時上り（乗務終了の意味）十

味のコーヒ

モダン 川柳



心齊橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい

時半頃の上りから午後八時半上り午後十時半上り等々から終車勤務の日には午前〇時上り迄その種様であつてその時間を見はからつて迎える来る妻のその待つ時間は普通の勤め人に無いつらさを私は知っている。キツト迎えに来て欲しいと思う心を持たず迄の妻の此の十五年間の雨の記録なんて誰も知らないであらうし本人自身もそれ程には感じてはいないので無いたるうか。私は此の目に見え無い努力を皆さんに知って頂いて、私が雨を好きだと云つた意味に解してはしいのである。

近頃は長女が妻の忙しい時には変つて来る、その中に次女が来るであらう、又三女が来て呉れるであらう。私は雨が降るたびにまたたのしくなる心を押さえられ無い込み上げる喜びの笑いを。

「土砂降りの日に産れたをまた言われ」 春 巢

い奴が居るので私は此の句を忘れていない。彼も雨が好きだという幼い頃親父が酔うと雨の中を産婆さんに走った事を云われたそうだが、その内に耳にこびりついたか雨がたのしく好きに成ったという彼と私はよく一緒に飲みたくなる。雨の好きな二人は共に酒が好きであり、妻と子を愛している、二人は本気で妻以外の女の愛を受け入れ無いであらう事を知っている、しかしそれは私の心の中の一人言である、他人にはわからない勿論妻にもわからない。

「交心をなじる女に雨の音」

淡 舟

この句に胸をいためる男女に私はあやかりたいとも思わない。たのしい雨に為に

岸和田の雨祭

内藤きさ子

毎年のことながら、九月の十四、十五両日は世界的にも有名な岸和田祭の日です。

お囃子へ踊り出した城の松

チキチンドン／＼の音も勇ましく二十余台のだんじりが市内を練り廻ります。

「岸和田のだんじりはカジテコ上手でよう飛ばす」と子供等が唄う

ように、あまり飛ばし過ぎていつもその筋からお叱言を喰ったり、三面記事を賑わしたりする始末です。

宵宮の十四日は朝の三時頃から太鼓が鳴り出し町内の若い衆が「起きよ！起きよ！」と町内をひとまわりします。云われなくともだんじり気狂いの連中はひと晩だんじりに付ききりで、テケテンテケテンと低く太鼓を鳴らしつづけます。

午前六時(昔はもっと早く)全部のだんじりが目ぬき通りへ出て来てぐるぐる市中を走り廻ります、揃いのハッピ揃いの鉢巻その朝の威勢の良さはまさに圧巻とも云へるでしょう。

だんじりが好きで育った声を出し

見物へつき当るのもテコにくせ

そして夜になります

五段構え六段構えに高くつけたたくさんの紅提灯をゆさぶらせながら岸和田城の壕の水に姿を映したり街をゆっくり過ぎてゆく様はこれまた名物の名に恥かしからぬ風情です。

提灯の灯に美しい祭の子

さてこのようなすばらしい岸和田祭にも一ツの泣きどころがあります、それはこの両日中のいつかにたとえ少しでも雨が降ることだそうです。「岸和田祭は下駄まつり」といわれるゆえんもそこにあるのです。

るのです。

いつも怪我人を出して神様を怒らせるからだなどともっともらしい事を云う人もありますが、これは九月という月が悪いのです。

台風月とも云われる九月の中旬頃はもっとも天候の変わりやすい季節です。だから岸和田祭は下駄を履いて見にゆかねばならぬという意味です。

久しぶりを祭の波にうばわれる

雨脚に合はす太鼓をうれしが

雨がさん／＼と降って来ます

でも地車を曳く若い衆にはこたえ

あんなにきれいだつたハッピは

雨にぬれて汗と一緒に肌にな

びたりすいっついていきます。モモ

ヒキも泥ハネでビチャ／＼です。

顔からしづくを垂らし声は半分

れかかっています、それでもエツ

サ／＼ヨイヤサ／＼の掛け声も勇

ましく走ってゆきます、大屋根小

屋根に乗つてうちわを振る大工さ

んも悲壮な姿になっています、し

かし見物人もまた飽きもせず傘を

さしてこれを見つめるのです。毎

年毎年繰り返されるこの同じ行事

を私もまた飽きもせずに見に出

ける一人なのです。

らしいとも時には神聖なものとも思いますが、物心つく頃からお祭の雨が一番悲しかった私はこれから先もやっぱりそれを気にしながら見物人の中に交って早く晴れ間を出して下さいと神様に祈ることでしよう。

しかし何といつてもわびしいのはお祭が済んだ翌日の雨です、あちこちに散らばったゴミ、人気がない見世物小屋には荷物がたんで置いてあります、川の流れも知らぬ顔、叩き売りのおじさんも、街頭パチンコも廻転機もどこへ行ってしまったのか夢のよう、しかし私の耳には昨日までの地車の太鼓や若い衆の声がまだどこかで聞えるような気がするのです。

サーカス小屋をそつとのぞいたらお鼓が一匹雨を見ながら何か喋っていました。

象のないサーカスが来た秋の雨

お祭よまた来年まできょうなら……

雨男・選挙

小西雄々

私の所属する川維末子支部の句会は今後一時から五時までであるが、水鏡君が句会に出席すると、朝からお天気が急に崩れて、帰りに傘がなくて困った事が数回ある。天気予報は、夜半から雨模様といつていても、句会中途の三時頃にはポツリ、ポツリと降り出したり、上りかけていた雨がまた降り出したり、雨と妙な関係がある男である。ところで本人は他人がさわくほど、そういう事を気にせぬ性質で、至極のんびりしているところが、いかにも柳人らしい。水鏡君が句会に出席する事が、あらかじめわかたら、天気の日でも雨具を用意せよ、と、変な台言葉が出来た位です。

雨男来れば本当に雨となり

雄々

四月の地方選挙も終わりました。今度こそ公明選挙を、と、期待したのですが、相変らず悪質な選挙違反が相えたのも特色でしたが、五選の知事や市長も出ました。ともあれ「お願いします、お願いします」と、うるさい位でしたが、この言葉を聞かなくなつただけでもやれやれ、といった気持ちです。然し、選挙がすんだあと、ピラをはがさず、そのまま放置してあるのは、いだけません。特に、雨の日にはピラが濡れているのを見るとき、あまりいい気持ちのものではありませんが、それが落選候補のものであると、一抹のさみしさを覚えます。

五月雨に落選候補のピラが濡れ

雄々

第百四十七回

大萬川柳

「三味線」

入選発表

選者 麻生路郎先生

投句総数六百七十四句

入選 五十句

太極に乗って人形は身をもたえ

京都 王石

政界の裏を三味線聞かぬ振り

会吉 弘朗

三味線もひけ虫もひけ参議員

玉島 旭峯

今どきの妓を叱つては三味を拭き

大阪 薫風子

糸が切れても老妓は自若弾き続け

岡山 周甫

休診の無聊を女医が三味を出し

金子 雄々

撥もてば師匠の声にとげが出来

和泉 東天紅

湯加減がお気に召したかアツルシヤン

笠岡 桃里

民謡へ撥で指さす島が暮れ

大阪 福郎

三味線の流しマンボも弾きまっせ

岡山 東岸

セーラ服着たまま三味を習いに来

豊 圭水

三味線に助けられたと思うてず

岡山 十九平

三味の音に尊王攘夷を連想す

大阪 柳志

三味線も校歌になると撥をおき

大阪 竹莊

三味線弾きまで連れてきて鐘一つ

同

粹な余技三味をひくとは知らなんだ

枚方 珠笑

美しい二度目の母は三味が弾け

同

撥だこが家庭の主婦にしておかず

大阪 文蝶

三味線をうつかり弾いて過去が知れ

同

撥さばき今も生きてる佐吉の譜

神戸 どんたく

口三味線湯気の中からまだきこえ

同

三亀松を地でゆくような四疊半

岡山 宗義

三味線を持てば確かなおぼあちゃん

同

花の下流しの三味線借りたがり

大阪 春果

団地へ越して三味線のおきどころ

同

別邸の三味三の糸切れたまま

同

鳥追いの三味白刃をくぐり抜け

同

三味の音が踊る阿呆を休ませず

同

三味線を末座の一人放さない

同

二上りだヤレ三下りだとノーチップ

同

三味持つて別れ話に触れさせず

同

王将も弾けるやとなの顔のしわ

同

雲行きを察し三味線弾かさせず

同

結構な身分炬燵で三味を弾き

同

神戸 静馬

撥おいて師匠やさしい京詠り

同

長雨に三味も芸妓もしめりがち

同

聲古三味止むころ祇園たそがれる

同

奥座敷ピンともシャンとも鳴らぬまま

同

三味線に弱いとは芸妓の言うことが

同

旦那芸系にのらないとこがもて

同

三味線に東大軽るくあしらわれ

同

三味線を弾かねば食えぬ文化財

同

座りだこ撥だこ師匠貯めている

同

もつれ糸切れぬ鶴八鶴次郎

同

三味線を遺して養老院で果て

同

壁に三味掛けて色音はまだ失せず

同

地

同

同

撥持てばちかよりがたい師芸者

天

大阪 薫風子

惜春の音の一つに星の三味

大万川柳ベストテン(五月現在)

- | | | | |
|----|-----|-----|-----|
| 一 | 薫風子 | 一〇〇 | 大阪 |
| 二 | 好郎 | 八五 | 大阪 |
| 三 | 文蝶 | 七五 | 大阪 |
| 四 | 梅里 | 七〇 | 大阪 |
| 五 | 連二 | 六〇 | 岡山 |
| 六 | 圭井堂 | 六〇 | 堺 |
| 七 | 柳志 | 五〇 | 大阪 |
| 八 | 方大 | 五〇 | 大阪 |
| 九 | 恒明 | 五〇 | 大阪 |
| 十 | 珠笑 | 五〇 | 大阪 |
| 一一 | 洗里 | 四五 | 岡山 |
| 一二 | 満秋 | 四五 | 名古屋 |
| 一三 | 静馬 | 四〇 | 神戸 |
| 一四 | 晃奇 | 四〇 | 大阪 |
| 一五 | 真奇 | 四〇 | 大阪 |
| 一六 | 阿茶 | 三五 | 大阪 |
| 一七 | 春果 | 三五 | 大阪 |
| 一八 | 東岸 | 三〇 | 岡山 |
| 一九 | 一三夫 | 三〇 | 大阪 |
| 二〇 | 東天紅 | 三〇 | 和泉 |

次の題「宿命」五句以内

切 五月十日

発表 六月二十日

七月の予告「悪名」

切 七月十日

発表 七月二十日

投句先 大阪市阿倍野区松崎町三

大万川柳会



阿古屋

富士野鞍馬

阿古屋という女は、京都五
条坂の遊女というのである
が、これは、享保十七年（一七
三二）文耕堂と長谷川千四と
の合作「壇浦兜軍記」に出て
くる架空の人物である。その
三段目琴責めの場でいっそ有
名になった。

この阿古屋は謡曲「景清」
からヒントを得て作られたと
思われる。その文句に「我一
年尾張の国熱田にて遊女と相
馴れ一人の子をまうく」とあ
る。

五条坂（今の清水坂）に遊
女屋があって、その花扇屋
戸平次方に阿古屋が居て、清
水観音へ日参する平景清と馴
染みになった。

五条坂初手は素見の七兵衛

（タル七五）

一匁花で七兵衛馴れ初める

（一八）
景清がきす岡場所になじみあ
る
（拾五）
観音を度々七兵衛は売って行
き
（タル二二）
知りきって居るとあこやを主
馬なぶり
（一一二）
まあ小手をおとりなんしと五
条坂
（一四〇）
参詣の度に阿古屋ととちくる
ひ
（二三）
景清が三保の谷になる五条坂
はやくまいってきなんしとあ
こやいい
（万安八）
等と川柳はそれを詠んでい
る。「岡場所」というのは無
免許の遊里で、「主馬」は盛
久でこの人も清水観音へ日参
した。「三保谷」は八島の合
戦で景清と鍛引の相手であ
る。また景清は悪七兵衛とい
った。

「壇浦兜軍記」には

「尾張の国よりながながしき
野山を越えて清水へ、日毎日
毎の徒歩詣、下向にも参りに
も道は変らぬ五条坂、互に顔
を見知り合ひつ近附きになる
ともなく、羽織の袖の綻びち
よつと、時雨の傘お易い御
用、雪の朝の煙草の火、寒い
にせめてお茶一服、それがか
うじてさき一つ、こつちで思
へばあちからも、くどくは深
い観音経……」
とあり、川柳も
一服の茶が濃くなった五条坂
と詠んでいる。

景清は頼朝を狙って潜行し
ていたので、厳しい捜査中の
人物であった。その馴染みと
わかった阿古屋は、六波羅の
役所に引致されて、景清の居
所を責問されたが「知りませ
ぬ」で押通した。そこで琴責
めという風流な拷問となっ
た。「壇浦兜軍記」には、
「阿古屋が心の濁り水、今しも
呑むやと覚悟の体、重忠庭に
下り立ちて「ああ仰々し、鎮
まれしすまれ、阿古屋を拷問
の責め道具は某かねて拵へ置
いたり。誰かある持参せよ」
と仰せに随ひ持出づるは、い
とも優しき玉琴に、三味線、
胡弓取添えて、音締もさぞと

胡弓取添えて、音締もさぞと

白洲なる、阿古屋が前に並べ
置く……」

とあり、阿古屋は、琴、三味
線、胡弓の三曲を演奏し
て、

「阿古屋が拷問只今限り、景
清が行方知らぬといふに偽り
無き事見届けたり、此上は構
ひなし」
と、畠山重忠が判定したので
ある。

拷問に花も実もある畠山

（タル五三）

重忠はあざむかれない男なり

（二二四）

重忠の掬き十三筋に聞き

（二五八）

二十筋かけて重忠せめるなり

（八八六、九六）

「二十筋」は琴の糸十三
本、三味線三本、胡弓四本の
とこれ川柳に詠まれてい
る。

合計である。

破ったし聞いて阿古屋は願は
どき
（拾六）
景清は一度捕まったが、牢
を破って逃げたので、阿古屋
も観音様の御利益とほっとし
たことであろう。この牢破り
が歌舞伎十八番の「景清」と
して演じられている。

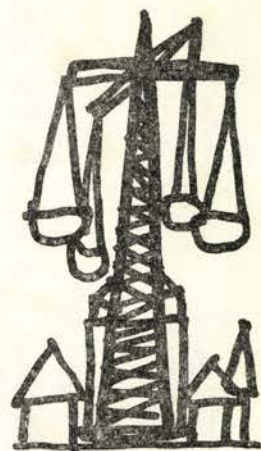
その後景清は頼朝の前へ出
て、両眼を自らくりぬき、日
向勾当となって九州へ下った
ということになっている。

勾当の手柄話は牢やぶ
（万明四）
勾当であかるく通る五条橋
（万明元）

とこれも川柳に詠まれてい
る。

「お買物」
は近鉄で!!

アベノ 上六
近鉄
アベノ77-8331
上六77-3331



窓 口 談 義

麻 生 路 郎

箸紙と大阪弁

ある蕎麦屋へ這入ったら、箸紙に「まいどおおきに」と書かれてあった。毎度お越しくださって大変有難う思っておりますの省略で、実に親しみのある言葉である。

それを見て、主人が心からお礼をいっているような気がしてうれしくなった。食い倒れの大阪の大ていの飲食店では箸紙へハンコで押したように、「毎度有難うございます」の文字が見られる。店主の一人一人が箸紙の文字にまで心を配っているわけではないことは百も承知をしているが、これは芸のないことだと思う。

折角のスペースをこんなきまり文句でお茶を濁さずに、心ある店主なら、こんな僅かなスペースにでも、店主の個性を出してもらいたいと思う。

たいと思う。

前述の蕎麦屋の店主は心からの叫びを、そのまま、「まいどおおきに」と記されたのだと思う。それでいいのだ。ホントに大阪に住みついている人ならこの僅かな七文字の意味がピンと来る筈だ。余所の店が毎度有難うございますと書いているから、うちもそうしたのですというかも知れぬが、そうした仕入文句の「毎度有難うございます」は既に既に人の心を動かす力を失っていることになぜ心づかないのであろう。

仕入の箸紙に仕入の文句、それは大量に印刷することが可能だ。それだけ店としては消費材料が安くつくことは間違いないが、その店の特殊性は箸紙一つからでも発見出来るようにした方が、より効果的ではないだろうかと思う。

電車などで、車掌が「毎度ご乗

車くださいまして有難うございます」と唄でも歌っているように叫んでいるのを聞くが、その声に、真に感謝の念がこもっているとは誰も思わないであらう。ただそういへと上司からいわれるからそういつているのに過ぎないのではなからうか。心の底から流れ出る言葉でないかぎり力のないことは「毎度有難うございます」の例に尽きる。

私たちの創る川柳にもこうしたことがいえると思う。川柳はこうして創れと教えられたからといって、いつまでも、型に嵌まった句を削ってはいけぬ。大たい呑み込めたらあとは自由に創ることである。私はながい間違をして来たが、型に嵌まった句の選が一番こまる。採れば殆んど採れる

が、その作家らしい特異性の句には一句として打つ突からない。棄てれば皆棄てねばならぬ。選者としてはまことに、困った話である。作家としても、自信をもって投じて来た句を皆棄てられては、たまったものではないだろう。

みんなが「毎度有難うございます」式句を削っている中にせめて一人ぐらいいは、「まいどおおきに」と、型式は違ってもいいから自己の本心を率直に、素直に詠んだ句があることを、のぞみたいのである。大げさな方方をすればそれが前衛派であらうと、本格派であらうと、中間派であらうと、そんなことは問題ではないのだ。

とにかく人間のホントの心を川柳を通してブチまけて欲しいのだ。私のように水い間、川柳の中に浸っている者にとっては、おれは前衛派だこんな新しい句が君たちに詠めるかいと大見栄を切っている連中を見ると、吹き出したくなるのだ。それと同じように本格派でなければ川柳に非ざるようにに騒ぎ廻っている連中を見ても、へへい、そんなもんですかネと、そっぽを向いていたいのだ。こんなことを書くと彼等は顔を真っ赤

にして食ってかかるかも知れないが、そんな連中のお相手はご免だ。

私は新創であらうと、歌舞伎であらうと、文筆であらうと、能狂言であらうと、いいものはいいというに過ぎないのだ。ニセ千円札は三千円に買ってくれてもご免だというのだ。

柳 誌 の 題 字

すべての川柳人がそうだとはいわないが川柳人には案外視野の狭い人がいる。川柳人たるものはモット、モット視野を広げる必要がありはしないか。

たとえば、川柳が文学であり、芸術であるといきまぐくらないなら、それが同人雑誌であらうとも、自分の愛する雑誌の題字ぐらいいは満足な字を書いて欲しいものだ。オレは悪筆だというのであれば書道の人にも頼んだらいいだろう。このことは表紙画についてもいえるだろう。「番傘」の題字は少し以前は柳傳の中から、番傘の文字を拾ったものだといっていたが、落ちついたいい文字だった。少しくクラシカルな嫌いがあつたが、悪い題字だとはいえなかった。最近は何案文字を使ってい



一路集

赤字

若本多久志選

子供なりに家計の赤字気にしてる
足るようにせいと夫はそれ切り
結局は政治のせいにする赤字
家計簿へ吐息でつけるベンの色
赤字以来家計簿放つとかれ
長話し赤字同士の市場かご
今月もどうせ赤字だなどと飲み
高校をやめさす赤字とは悲し
焦げつゝ赤字を消して社長退く
選挙区で赤字路線のテープ切る
赤字でも料理屋の払い綺麗なり
社の赤字労資の言分喰い違い
追いつけぬ赤字に馴れて妻静か
親の代からの赤字がまだ抜けず
帳尻は赤字へソクリ別に貯め
赤字まだ続いて子らは食べまう

光明 孝正 雄々 和三郎 たもつ 兼治郎 孝正 雄々 八九寸 房太郎 木魚 井蛙 静波 甦光 可住 明朗

支払いが律気で赤字つづけてい
足りぬ月だけ家計簿出して見せ
労働歌どうにもならぬ社の赤字
赤字から婦唱夫随の酒の量
億よりも万の赤字に身を削り
春宵を赤字忘れた花に飲み
家計簿は赤字のまんま花が咲き
ベースアップしても赤字はまだ続き
赤字解消軌道に乗って重役会
計理士は何んとか赤字にかえてくれ
税務署用赤字株主了承し
赤字とは見えぬ社長の自家用車
赤字とも知らず恩給減やまれ
なれつゝになつて赤字は苦にならず
赤字だけ言うてへそくりには触れず
赤字とは見えぬ本社のビルディング
パトリオをかせ赤字が減つたバー
赤字にはかわりもなく花が咲き
赤字にも馴れて集金煙に巻き

瑞歩 秋路 晃康 旋鳳 涼人 祥月 保夫 隆史 弘朗 旭峯 杏花 千翁 素身郎 孝風 十九平 孝正

口先き

永松東岸選

口先きを尖らすだけの娘に困り
口先きは帰る帰るで腰をすえ
セールの口先き欠点にはふれず
口先きと違い見舞に來てくれず
口先きで賞めてくれた氣に入らず
口先きで母を丸める娘に育だち
口先きの下手が頑固に箔をつけ
ただホンの口先きだった葉書来る
浮気して來て口先きの旨い事
口先きは便利ペロリと舌を出し
口先きの公約当選して忘れ
口先きを信じ愚直は通いつめ
口先きの世辞真顔で聞くと年齢
口先きで迎えて世辞で送り出し
口先きで労働社長にあしらわれ
口先きで守衛をまいて入り込み
口先きでライバル祝す阿呆らしき

桂仙 木魚 惠二郎 生薑 檀雄 王石 十九平 雄々 桂仙 檀雄 野迷路 八九寸 代仕男 庸佑 井蛙 句菜坊 繁太郎 歌子 保夫 圭水



街で拾う

吉田圭井堂

しがらき屋

先日田舎で小学校の同窓会があり出席、
同じ大阪の家根の下に住みながら一度も会
わなかった旧い友と五十年振りで会った。
その友が真つ白髪だったのにも驚いたが、
その友の話にも驚いた。

妻君が十六も年下で美人であり貞女であ
ることと職業が、しがらき屋だそう。聞
けば屋台車で、わらび餅やしがらきを小路
から小路へ子供相手に売り歩くのだそうで
すが、いつの間にか老舗がついて午後三時
前後には会社や工場からおやつ替りに、三
百円五百円とまとまって証文があるので、
稼ぎに出た日には六千円から七千円の売上
げがあるとのこと、一ヶ月平均二十日間働
いて実収は八万円から十万円位いとのこ
と、雨降りには勿論、出掛けに坊さんと擦
れ違つたからと言つては休み、いたちが
顔を出したと言つては休みながら結構そん
な収入をあげている。一円の税金も払わず
見栄も外聞もなく旧式の背広に股ボトムも
掛らぬズボンをはいて、酔えば歳にも似ぬ
Y談を飛ばし、何の屈託もない天真爛漫、
著まる一方の金を少額ずつ人に貸している
とも洩らし、明日は買った借家の登記があ
るので遅くても今夜中に帰えらねばならぬ
と言つていた。どうみても法螺でないらし
いと帰つた後で噂したものです。

口先きのお世辞へ口先きのお礼 同 曉明
 ライバき口先きだけの世辞を言い 同
 口先きの世辞を病人うるさがり 良江
 口先きに負け手を出し足を出し のぶ子
 口先を合わせて縁談まとめあげ 三五島
 口先きのお世辞に似てる昼の月 旭峯
 口先きを捻って見たが追いつかず 生薑
 口先きのうまいババなり二号置く 宗義
 口先きのお悔みよどみなく流れ 惠二郎
 口先きのある口先きに牛耳られ 同
 口先きに乘せて上手な親思い 千翁
 極道のまた口先きにしてやられ 孝正
 よく喋る口先じつと見つめられ 雄声
 口先きの返事テレビに佳境なり 瑞歩
 口先きがためて転々職をかえ 同
 許す気にいるのに口先きには叱り 愛鳩
 口先で唄う玉将鐘一つ 同
 口先きに出そうで出ない物忘れ 藤波
 口先きの下手が泣かせる文を書き 同
 口先きで教えて呉れたふところ手 同
 運のいい奴口先きだけで 弘朗
 お調子に乗って口先きまででかけ 静水
 年功口先きばかりうまくなり 愛鳩
 口先きに乘って僕だけ左遷され 宗太郎
 保険屋の口先きに乘る昼休み 同
 口先きの猛者が屯す涉外課 兼治郎
 口先きの付合ひだけにする団地 兼治郎
 人
 さて借りに行けば口先きとは違い 圭井堂

地
 口先きの礼は会う度に言い むじな
 天
 口先きで一億軽うあしらわれ 雄声
 内 職

石倉旅風選

内職がうまいく行く程けちになり 野迷路
 内職の裏打つ音に雪ドドド 桂仙
 内職の百個十円一時間 王石
 内職でやつと赤字を消す暮し 曉明
 手内職手伝う子等はすぐに飽き 愛鳩
 内職の書道教授は小さく書き 保夫
 内職を手伝う夫の背が丸い 宗義
 内職の老眼鏡が鼻へずれ 惠二朗
 内職をして家計簿をつけはじめ 可住
 乳飲ます間も内職の手が動き 同
 振り向けばすぐ飯になる手内職 旭峯
 内職の妻に夕刊読んでやり 晃康
 内職の妻に済まなく病んで居り 孝正
 内職のつかれ神経痛になり 杏花
 内職の事にはふれず妻は酔ぎ 藤波
 内職の灯に安らかな子の寝息 晃男
 アルバイトサロンの方で支えられ 雄声
 人様の嗜着に徹夜灯をともし 十九平
 補助受けぬ意地は子故の手内職 和三郎
 内職の糊ひからびたままに病み 光郎
 あと一人嫁かせるまでの手内職 旋風

佳

内職を休む夫の誕生日 淀月
 内職の仕上げテレビの前へ来る 八九寸
 内職の妻を尻目に床に入り 勝子
 内職で買った女房の服が地味 静波
 内職でテレビを買って見直され 惠二朗
 内職を夫の欠伸で終いかけ 蛙水
 内職に慣れたわが手のふとあわれ 惠二朗
 ミシン踏む音姑のかんにふれ 勝子
 水で顔洗ひ内職また続け 凉人
 出戻りの娘内職手伝わず 十九平

人

内職の母へ届いた電気釜 孝風

地

内職の汗をコストがあざ笑う 惠二朗

天

無駄づかいするなと教えられた丈 歌子

軸

金持ちにならん仕組みの手内職
 内職の銀紙器用な手をわらう

▽応募される方△

「路集ランは、与えられた課題をいかに巧みにこなせるかの試練の場所であるから、第一に題を充分に検討して、それから作句にかかることである。そして出来上ったら、出句するまでに、素材の扱い方はこれでよい。字句はこれでよい。類句はないかといろいろの点から自分で慎重に審査してから、応募していただきたい。」

(路)

まとまった資本を下ろして事業をし、やれ手形だの不渡りだのと、車を飛ばして銀行にお百度を踏んだり街の金融機関に最敬礼をし、一面四六時中税務署と戦い、一つ間違えば破産の宣告をうける種族と、このしがらき屋さんのおっさんと、どちらが生甲斐でしようね。
 日銀がどうのと言わぬ人が貯め

約手

私の友人に街の高利貸がいる、一日その友を訪ねて歓談し、そこへ今時珍らしい合コンビを着込み白足袋を履いた初老の物静かな紳士が折かばんを小脇に這入って来た。友人に
 「ええ出物おまへんか」
 「あなたに傾合いの一枚あります、その代り安すおまつせ」受取って見て
 「なんぼだす」
 「八錢だす」

「えらい安すおまん、十銭にいきまへんか」
 「一流やさかい八錢やない」と
 「えらいかとおまん」
 「辛抱しときなはれ」

「ほんだらこれもうときまつさア」
 哲さん何の事か判りますか。袍を開ける時、チャッ袖口が見えた法衣ですわ。

つまりお寺の坊さんが街の金融機関をそれからそれへ廻って固い手形を買い集めている風景ですわ。袍の中味はお経の本や珠数や輪製装ではなく現ナマと約手綴りですわ。道理で八錢だと言うのを十銭に値切る訳が茲にあるのです。

お経より固い約手が有難し

築山快夢起氏歓迎の夕

四月二十六日午後六時から南地宗右エ門町、料亭いろはに於いて、川維ハワイ支部長築山快夢起氏の歓迎会を催した。氏は三月三日、羽田着以来、沖縄、九州、中国、四国と巡遊され、来阪の予定日が確定しなかったもので、しごく内端的な集りを催した。道頓堀の夜景、芸妓の舞踊、豊乃女史、小石女史（生々庵医博夫人）の日本舞踊をハワイへのお土産にしてみたら。氏は当夜の感興として「眼にしみる宗右エ門町の町あかり」の一句を費された。写真説明：前列は、多志志・堀里・小石・快夢起・路郎・第九・重良子・春雄の諸氏



柳一界一展一望



旬会

▼本社六月旬会は十日（月）午後六時から千日前電停自安寺で開催する。柳友お誘い合せの上一人でも多くの御出席をお願いする。▼七面短詩文学クラブ（和歌山市）川柳部旬会は五月十五日（水）午後六時から奥新和歌浦魚叉楼で開催。▼南海電鉄川柳会（大阪市）は五月十六日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）は五月十七日（金）午後五時半からコクヨ株式会社会議室で開催。▼大阪通信病院川柳会青葉吟行会は五月二十五日（土）午後一時半から京都鴨川荘で開催。以上路郎主幹出席。▼川維米子支部松露百号記念全山陰川柳大会は昭和三十八年五月十二日（日）午前十時から米子市皆生温泉友誼寮で開催され盛会だった。▼四国川柳人親睦川柳大会は五月三日午前十時から琴平町公会堂で開催。▼御賀阿祭川柳大会は三月二十二日竹原市山内静水居で開催。▼奥蔵川柳会旬会は五月十二日善通寺乃木神社で開催。▼川柳我業莊春の大旬会は六月二十三日正午から名古屋市中区広井町駅前西祐寺書院で開催、華題、一代・エリス・仲良し・夏の山、各題三句、投句は三十四封入の上、名古屋市中区米田町二六長谷川鮮山宛。▼第二回西条川柳大会（広島県）は五月十二日（日）正午から西条町耕道会館で開催。▼くろがね創立三十周年復刊十年記念川柳大会は五月十二日（日）北九州市八幡区商工会議所で開催。▼岸和田川柳会は五月十二日（日）奥新和歌浦へ汐干狩り吟行旬会を開催。

消息

▼石曾根民郎氏（松本市）は七月七日（日）の第十回川維川柳まつ

りに出席されとのこととお待中上げる。▼浜田久米雄氏（岡山市）は五月二十六日（日）不朽洞へ米訪、路郎主幹夫妻と歓談された。▼若木多志氏（豊中市）は五月六日、南九州巡遊の旅に出発、鹿児島、指宿、霧島、宮崎を見物、桜島、日南海岸の奇勝に堪能され

た。南国はすでに初夏の候である。一高千穂は雲にかくれて湯の（経）を寄せられた。▼阿部佐保蘭氏（東京都）は四月二十三日不朽洞へ米洞せられ路郎主幹豊乃女史、安子さん薫風子氏を交えて歓談、翌日は薫風子氏と折から上演中の文楽を観劇京都経由で帰京され、外人もさわりへちゃんと手を叩き」の句を寄せられた。▼植村客遊子、阿万万的、辻白溪子、吉原紅月等の不朽洞員諸氏は五月十二日（日）皆生温泉で開催された川柳米子支部の松露百号記念全山陰川柳大会に出席され、川維岡山支部から参会された浜田久米雄氏等を交えて山陰の柳友と交歓された。▼尼緑之助氏（出雲市）から、一ヶ月余りも雨に降られた山陰は低温に悩まされたが、皆生温泉での川柳大会の頃から天気回復、各地の柳友と久しぶりに話し合う機会を得て、身心ともに晴れ上った気分になりました。▼石原青蓮乃氏（東京都）は東野大八氏（美濃加茂市）、宇和川木耳氏（布施市）と同道、五月五日不朽洞を訪問、路郎主幹夫妻と歓談された。▼小西雄々氏（米子市）は倉吉川



どんぐり川柳会春季川柳祭

川維本社から川村好郎・清水白柳両先生をお迎えして四月十日十五時、瀬野野宮神社で開く。写真説明：前列は、のん子・きよ子・凡子・弥生・白柳先生・好郎先生・菅野・紀太郎・ひとみ、後列、与太呂・ならを・万草・正法郎・ひろし・よしを・しげる・常人・五郎・広祐・静波

一ヶ月余りも雨に降られた山陰は低温に悩まされたが、皆生温泉での川柳大会の頃から天気回復、各地の柳友と久しぶりに話し合う機会を得て、身心ともに晴れ上った気分になりました。▼石原青蓮乃氏（東京都）は東野大八氏（美濃加茂市）、宇和川木耳氏（布施市）と同道、五月五日不朽洞を訪問、路郎主幹夫妻と歓談された。▼小西雄々氏（米子市）は倉吉川

不朽洞の人々



那谷医院の那谷長次氏

ポケット銭転げて診察台にて

光 郎

生まれつき絵が好きで、中学を出て画家を志望したが、一家の反対でとうとう医者になってしまった。下手の横好きとか南無を習って今も余暇を楽んでいる。

川柳の方は御存じの通り駄作ばかり、彼岸はまだまだ。然し老い呆けにならぬ限り続けるでしょう。もう人間的な野望はない、余生を趣味に生きたいと思っている。(加賀市大野)

柳会「打吹」五十号記念句会の四月二十一日、鳥取の大西八歩・河村日満両氏はじめなつかしい先輩柳人と歓談されたが、同大会の様子は当日午後七時十五分からNHKテレビのローカルニュースで放送された。▼光好陽子さん(岡山市)は地方選挙と、編物指導とお孫さんのお守りで忙しく、少し暇を作らぬと体をこわすことになると思いが、作句も思うにまかせぬ日を送っていられると▼前田喜代人氏(下関市)は川傍柳初篇研究の共述を担当していられるが、四月の下関市商工会議所議員改選に立候補し、五度目の当選をされた本年は同市が国体引受け市になったので、たって立候補されたのだそうである。▼木村千容氏(倉敷市)は五月十五日夫人同伴で出雲大社から三朝温泉に遊び、神経痛の治療に二週間ほど逗留される予定。大社では夫妻の寿齢百四十七、神業をあげて大神に感謝された。▼杉本一鶴氏(貝塚市)は四月二十八日から度々喀血、それにもなう発熱で難渋していられるが、神様に全てをおまかせして心は日々平安に過しておられる由。▼工藤甲吉氏(青森市)は県知事選挙に次ぐ統一地方選挙、両陛下の行幸啓の取材準備に忙殺されている。なお、氏の勤務先東奥日報社は六月一日から旧社屋に別荘を告げ新築に着手される。▼田垣方大氏(倉敷市)はこの二三ヶ月職場の日曜出勤が多く忙しい日を送っているが、四月二十九日、

社内旅行で別府へ遊び日頃の疲れを落された。▼中村九呂平氏(下関市)に三月四十年の鉄道生活から勇退、四月一日から某商店に勤務されたが、第二の人生は消耗甚しく健康をそこね、病臥された。充分静養の上体質に応じた職場を見つかるまで浪々するつもりとの事。▼浜田久米雄氏(岡山市)は一月末から「くこ(拘紀)」の粉末を朝夕飲んでおられる。快便、快眠、快食毎日が楽しいとのこと。不老長寿のくすり漢方薬局に売っていて月一人二百円あれば十分とのこと。病弱の人は一つ試して見ませんか。

句集・柳誌

▼前号既報の川上三太郎句集「孤独地蔵」は昭和三十八年四月十五日発行された。限定五百部。▼川維米子支部から出ている川柳松露は五月号を第百号記念として昭和三十八年五月一日発行された。巻頭言で小西雄々氏は露郎先生の指導と山陰柳人の協力に感謝し、同川柳会の生みの親、故三嶋美笑氏を追憶している。▼川柳句集「あげ汐」が昭和三十八年五月一日、汐風十五周年記念句集刊行会から発行された。五十三名の自選句集だが大半は愛媛県下の柳人、新人の多いのが特徴とのこと。六年ぶりの第六輯とのこと。B列6型百十六頁、定価百円。▼内藤喜夫第一句集「阿羅波比」が昭和三十八年四月二十五日発行された。作者四年間の川柳作句の集成四百句を掲載、自分の作品を厳しくみつめ

今後の精進の指針にと刊行された。題の「阿羅波比」は氏神の名。非売。

転 居

▼若本多久志氏は西宮の旧居改築のため下記へ移転。豊中市字服部五〇六、松殿園住宅七六

▼大西迷窓氏は高知市帯屋町二ノ八二へ

▼花又花醉氏は松戸市紙敷二八の一へ

弔

▼加藤向水氏(新居浜市)は五月中旬に亡くなられた。本号の「名句と難句」に掲載された批評を讀まずに逝かれたのであった。謹悼。(薫)

不朽洞会から

▼川維川柳まつりは本年七月七日(日)開催をもって第十回となるので各地からも参加されることとなった。宿泊希望の方は前もって申込んで下さい。お世話いたします。

☆新会員紹介

五月

清水一保(鳥取県)

正

雄々氏推薦

☆安部立美氏(大阪市)、中内彦彦氏(郡山市)は五月限りで、野口迷羊氏(滋賀県)は六月限りで、それぞれ家事の都合により退会。(多)

明治・大正柳誌順礼

奥津啓一朗

明治三十八年(一九〇五)

十一月三日、川柳、第一号、菊判六十四頁、東京市神田区今川小路一丁目六番地北上屋書店発行、編集人神田区駿河台南甲賀町八番地井上幸一、発行人神田区今川小路一丁目六番地齊藤銀次郎、一部八錢。

二三十本喰ってまづいの何のかの
笑学坊
文象

有酒満瓶聊か人意を養うす
甘突
寒表も夫れ相応の学者あり
桃泉坊

井上剣花坊(吾人の抱負)、劍花坊和上(柳樽寺説法)、高刻梅溪(川柳時代)、枯華庵主人(三面子と砂糖袋)、近藤船坊(当世文士気質)、井上秋剣(井上剣花坊に与う)等々一書按いて紹介したいが別の機会に譲る。

(発行行詩堂氏蔵)

明治三十九年(一九〇六)

四月六日、ハナブリ、第六号、菊判八十四頁、東京淀橋小学校前へなぶり俱樂部発行、編集発行人東京府豊多摩郡淀橋町大字柏木百

廿八番地、秋好善太郎、一冊十二錢、

諸謔文、喜劇小説、へなぶり、川柳、短文、一口噺、俗語(都々逸)、へなりの漫画の綜合誌。

募集吟「下女」の天位が

變町 森安笑葉

気の軽き下女はお尻が落付かず同じく「穴をあけ」の佳作

信州 小山痴狂坊

穴をあけた店りの白鼠外はおして知るべし。(落合行詩堂氏蔵)

十二月五日、葉柳、第貳巻第参号、菊判十八頁、大阪市西区京町堀上通り三丁目百四十番屋敷西

柳樽寺発行、編集発行人西田嘉吉、非売品。

西田当百

乞食までして来た程の名奉行篝火の蔭に落火が白く見え

京洛の智慧は嵯峨野の辺りから

小島六郎坊、西田当百が夫々十

四字詩に就て書き、黒頭巾は辻斬

と題し本号には齊藤松窓を組上に

のせている。題詠二題外に十四字

詩を募集しているだけで、いまだ

雑詠欄もなく同人の一家吟欄も見

当らない、ただ毎号裏表紙に同人

交替で十句ばかり載せている。

当百はむだいで録で

新川柳家の川柳を人間詩なり

風俗詩なりと純文学として唱

導して居るに拘らず、一方に

は天保以来腐敗墮落の極に達

して識者を醒醒せしめた余声

は尚未だ一部人士の外は之を

口にするを潔しとせぬ傾向が

ある此際我川柳家の最も戒慎



△タケダ薬品
●疲労 ●食欲不振 ●神経痛 ●肩こり ●便秘 ●つかれ目
アリナミン
無臭性アリナミンD

齒の浮く様な態度は一例云々とある。

明治三十八年五月「新編柳樽」

創刊、第三号まで出し、第二巻第

一号(明治三十九年六月一日刊)よ

り「葉柳」と改題、第五巻第四号

(明治四十二年四月刊)にて終刊

(落合行詩堂氏蔵) (続く)

飛・燕・往・来

★岩崎愛二氏より

「落部・曲乃純」

キヨシが生前友人と来て絶さんしていました奥能登を歩いております。

曾々木海岸にて

亡き人も踏んだであろう石拾

う遠く御機嫌を伺います。

(四月廿四日) 和倉温泉

★築山快夢起氏より

「落部・曲乃純」

大阪滞在中は何かと御世話様になりましたありがとうございます。殊に道頓堀の一夕は誠に忘れ難い印象でありました。

奥様や小石

さまの至芸々

を拝見でき

ましたのも

何よりであり

ました。御心

遣いただま

た歯痛京都ま

で越し早速歯

科医の診療を

乞いました処

齒の根化膿、

橋高薫風子著 麻生路郎序

川柳集

有性

定価二百五十円 送費六〇円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

発行所 川柳雑誌社

金のツメ物のため痛むのだと申され、それを取去ってもらいましたから楽になりました。然し抜くことは旅中でもあり延期、従ってアテにして居ましたおいしい肉類はようかめませんのでヒカシして居ります。三日頃当地発名古屋を経て上京の予定です。

(四月二十日京都にて)

四日京都より名古屋へ、友人との連絡もつきまして四、五の両日名古屋城、テレビ塔、熱田神宮更に車を飛ばして大廟に詣で日本人らしい気分になりました「帰化しても拍手だけはお手のもの」帰途は最近完成した名四国道を選びアメリカに劣らぬ立派なのに感心、ただ遺憾なのは天候で、この所、雨男二代目になりました。「まだ雨に祟られて伊勢詣り」今日東京行です。

(五月六日名古屋にて)



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 五月句会 (大阪市)

5月10日 午後6時
会場——千日前自安寺

ながらく雨が降りつづいていたのにも拘らず、なかなか多数の出席者であった。一十・玲人・三司・保美・晃の諸氏が久しぶりに顔を見せられたのもうれしかった。春葉氏の語原の話も面白かったが、柳話のはじめにつけ加えられた晃氏の事につき、晃氏は直ちに司会者から柳話後一分間の許可を得て、これに対する釈明は実に川柳味横溢出席者全員をははえましました。今席の不朽洞カッパ受賞者は平沢保美氏であった。(摩)

出席者——路郎、紫香、いさむ、八郎、判志、水客、圭井堂、摩太郎、玲人、専翁、行人、静馬、東天紅、水京、すむ、圭水、市郎、阿茶、多久志、春葉、野菜、保美、柳宏子、晃、柳志、三司、文秋、井平、白柳、一栄、清子、いわを、舟遊、進之助、一十、生々庵、勝、清人、美称子、句楽坊、秀子、梅里、みさ子、恒明、薫風子、雄声、南宗、庸佑、季費、宏子、豊乃

兼題「助言」 麻生路郎選

助言して初めて知った子との距離 旅 風
助言とうとう主衣をとつちまい 静 波
助言した私ばかりにからみつき 隆 子
王手飛車助言したのはもう居らず 宗 義
叱られた助言今度は袖を引く 同
直らない身持ちへ助言遠去かり 高 志
口ごもる娘に彼が助言して 寿美司
子の助言親の顔色変えさせる 計 光
楽屋からかすかに漏れてくる助言 八九寸
難航の上司助言で波に乗り 繁太郎
老婆心ながらと酌いでやりながら どんたく
逆恨み助言も耳に入らばこそ 生 薑
へば将棋ぼちぼち助言出る時分 喜 仙
かんじんな処の助言が勘にふれ 与呂志
女房の助言欠かせぬ齢となり 多久志
ヒナ壇へ助言のノモが間に合わず 圭井堂
助言するはずだったのにそこに居ず 文 秋
若社長素直に助言聞いてくれ 清 子
助言してくれて家裁をくつがえし 梅 里
へば将棋助言も同じほどの腕 静 馬
選挙戦さすのワンマン助言聞く 判 志
重役の助言一声だけでよし 紫 香
助言よく容れ明君と仰がれる 多久志
助言する猶予あたえすましくして 梅 里
助言せにやよかつた鉢まわされる 一 栄
敷へびになった助言が叱られる 同
身に覚えあつて助言も共に詫び 圭井堂
親方の助言した手で今日も負け 野菜

女房の助言通りに子を叱り 保 美
末ッ子の助言もあつて父は折れ 市 郎
助言を蹴った夜のまづい飯 三 司
にくまれる助言と知らず嘸り出し 南 宗
その助言守られ方は報いられ 圭 水
フレッシュな助言で地位はささる 恒 明
妻の智恵たよりに威厳保ちつづけ 柳 志
アドバイスする程選手固くなり 一十
肝心の妻の助言が遅すぎる 舟 遊
口出しはするなと妻へ笑うとく 水 客
助言などいりませんわと気の強さ あいき
のぼせてる自信助言をふみにじる 恒 明
助言する方も溜息ついてくれ 春 葉
素面のとき聞こうと助言無視される 水 客
助言して助けてやった顔もせず 圭 水
助言はねつけたら干支を聞きよつた 保 美

兼題「隣室」 松江梅里選

隣室を聞けば新婚さんと云う 三 司
隣室の若い女で気がつかれ あいき
隣室は旦那が来てる窓灯り 清 人
隣室の声へ磁石のように寄り 文 秋
隣室の声は聞きたし眠られず 同
船甲斐もなく隣室気にかかり 多久志
隣室で其の他大勢あしらわれ 静 波
隣室に聞かす声なり妻叱る 宗 義
隣室へソツとしびれをなおしに来 柳宏子
隣室へ呼んで同じ嘘を言う 水 客
隣室はチップはずんだらしい声 柳 志
隣室の余興を覗く温泉の宿 井 平

木石でない隣室怒り出し 圭井堂
隣室は宝石泥と知らなんだ 阿 茶
隣室の事で向いとうまが合ひ 柳 志
隣室にスター泊つてはつとかれ 静 馬
隣室へ前の旦那の二才が来 阿 茶
隣室に負けまい月賦に追われても 恒 明
酔っている父を隣室から覗き 晃
隣室を子どもが結ぶ旅の宿 生々庵
産室の隣りで夫うろろうし 静 馬
隣室に共産党が一人住み いわを
隣室はラジオで消しているけんか 雄 声
隣室を気にもしていないハイチーン 柳宏子
壁一重いつも小声の辯がつき 進之助
団体と隣り合せた不仕せ 柳宏子
隣室のゴラスも聞く山の宿 市 郎
隣室へ合鍵が要る日の無気味 進之助
お隣りへ聞えますと聞えて来 三 司
隣室に待たしておいて忘れられ 静 馬
隣室の笑い孤独をいらだたせ 文 秋
通夜の鐘隣室で聞く蚊帳の中 梅 里

兼題「スタイル」 金井文秋選

スタイルに自信があつたスラックス 高 志
スタイルの遺伝短い単に育ち 静 波
スタイルはどうでもよいと更年期 寿美司
スタイルブツと和服へ女の眼が戻り 生 薑
スタイルがどうのこうのとら 妊み いさむ
スタイルは何うあらうとも高い靴 三 司
隙のないかつて大金借りて来る 静 馬
スタイルの限界あつたスラックス 野菜

マネキンのスタイル 今日も売れている
 合格のスタイル親子で胸を張り
 カマキリのような姿にあこがれる
 ロマンズグレイ スタイルも英国調
 悩殺スタイルへ一と眼乗り越し
 土砂降りにスタイルなんか言うしれず
 スタイルと若さ世界のミスに立ち
 ハイヒール履けばスタイル又変り
 食欲へ娘は逆うているなやみ
 仮縫いにスタイルブツクの夢が覚め
 スタイルが鏡の中に呼吸する
 満腹になつてスタイルくずれかけ
 三十を境にスタイル崩れ出し
 スタイルを気にして足を組み直し
 スタイルで四季を彩る戎ばし
 マンドリンのようなトップにある魅力
 二十貫二十貫なりのよい姿
 お茶づけを出されスタイルちと崩し
 スタイルに生きるモデルの軽めし
 子が二人あつてスタイルまた気にし
 堂々たるスタイルほどに持つていず
 中身とは別個にスタイル出来上り
 カッコいいスタイル女とはみえず
 正装で着られスタイルも在りユニード
 名残りまだスタイルリストとしての父
 スタイルか餓死か減食まだ続き
 スタイルを気にして女よく肥り
 スタイルはカワイに馴れた海女になり
 スタイルを構わないのも見栄のうち

東天紅 井平 多久志 梅里 圭井堂 専翁 市郎 進之助 静馬 東天紅 南宗 市郎 水客 井平 梅里 圭井堂 保美 玲人 舟遊 静馬 柳宏子 生薑 生々庵 柳志 雄声

スタイルがよいなと思う靴磨 三司
 共学がスタイルリストの芽を伸し 文秋
 兼題「人形」 橘高薫風子選
 人形の美に窮屈な玉の奥 八九寸
 人形劇大きい順の えらい順 同
 這い這いが出来て人形の手がもぎれ 高志
 母の声きこえて人形投げ出され 宗義
 薬人形竹槍の過去知って居り 静波
 指人形坊や茶の間の人気者 寿美司
 人形と同じ頭はカラッポで 隆子
 お人形へ母のない子の子守唄 梅里
 人形へ話しかけてる嬉しい日 市郎
 人形と違ふは息をしています 主水
 本妻は人形の様なお方です 清子
 人形を贈つて終る片想い 保美
 人形と遊びつかれて寝てしまひ 南宗
 人形でそねた気嫌とりになる 庸佑
 落ちぶれた家を人形に見透され 摩天郎
 貞女ふつとノラに傾きおのれを見 晃
 自分の名つけた人形置いて嫁き 旅風
 人形箱のうちにゴチャゴチャ子を育て 東天紅
 人形と馬鹿にできぬ程とられ 庸佑
 人形の眠に無視されて独りいる 水客
 胎教の京人形を飾つとき あいき
 母のくまのままだ人形を寝かしつけ 柳志
 つめたさが人形に似て老けてゆき 生々庵
 人形をおぶつた娘おぶつて来 野菜
 夜警ふとマネキン人形照らしてみ いさむ
 人形と話して自分を不幸にする 水客

ケースの中の人形の様な倅せよ 生々庵
 人形のような顔して値切らはり 静馬
 人形も一票呉れる顔に見え 圭水
 京人形顔は浮世の外の顔 三司
 施設の子人形もろて腹が減り 春巢
 マスコット逆に向いてるバスの事故 清人
 子が出来てもう人形にされて居す 白柳
 人形の使節失言しては来ず 阿茶
 人形の眼が復讐を戒しめる 玲人
 人形師一家揃つて無表情 野菜
 赤い血が欲しかる春は人形も 薫風子
 席題「参道」 清水白柳選
 参道へにはとりひき遊びに来 紫香
 園児たち参道まわつて近道し みさ子
 参道の長さにこころ整える 薫風子
 参道のこころ負けずに振りかえし 晃
 参道の終つたところで飲む話 春巢
 裏参道ここでもど食に押まれる 静馬
 二ア人の歩調参道から揃い 春巢
 参道の戻りはほっとした気持 市郎
 参道に泉があつて濡れている 一十
 参道へ花見るだけの人も来る 文秋
 老いらくの旅参道で押んどき 柳志
 参道で下駄の鼻緒が伸びて来て いわを
 折の空におき参道に物を乞い 梅里
 参道をせかせかせかと高利貸 保美
 ケーブルが出来て参道吾がむし 句菜坊
 参道は紋日のすんだ汚れよう 柳宏子
 参道にかかり団体ちと静か 紫香

参道は青葉の底の底とおる 水客
 参道の雨降つて止み降つて止み 同
 参道の迷見ボリスさし上げる 水京
 参道で押ませて置くバスガール 柳志
 参道へ出てアベックもちと離れ 保美
 参道に入り尻からけを下し 清人
 参道を外れてトイレ探がすなり 白柳
 席題「立ち話」 吉田圭井堂選
 誘拐が話題になつた立ち話 白柳
 立ち話始めの方は忘れたり 舟遊
 立ち話大はどつかと腰を据え 雄声
 立ち話よろめきドラマ見をこなる 恒明
 立ち話下駄のちびたを見詰められ 水客
 立ち話子猫の世話も頼んどき いわを
 畦道に牛を持たして立ち話 静馬
 立ち話どのつまりはのろけられ 恒明
 降り出して傘をひろげた立ち話 春巢
 立ち話朝顔の出来菊の出来 野菜
 豆腐屋のリンで別れた立ち話 梅里

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町5 (361) 9373代

支局 東京都千代田区神田錦治町2 (291) 9629代

名古屋市昭和区村田町2 (88) 9069

立ち話一と眠りした乳母車 柳志
子に鍵を先に渡した立ち話 保美
立ち話子供同志はにらみ合い 紫香
立ち話隣家の娘を上げ下げし 行人
立ち話たこが足出す市場 龍梅里
立ち話児は踏切へ差しかかる 圭井堂

兼題「女ぐせ」 本多柳志選

下校すりや勉強勉強と母のくせ 美祢子
女ぐせ並大抵でない修業 すゝむ
女ぐせと言わず女難の相と言ひ 雄声
女ぐせ思い懸けないとこで合ひ いわを
女ぐせながいかいしよの方もなし 文秋
ほんのうの犬がそうさす女ぐせ 圭井堂
妻のヒス何うにもならぬ女ぐせ 八郎
女ぐせ噂はどでもない男 専翁
女ぐせ知りつつおんな引つかり 静馬
女ぐせ年のせいにはしてくれず いわを
女ぐせ妻をまるめる術も知り 晃
女ぐせ今日はホープを喫うている 保美
女ぐせ淋しがり屋と知っている 水客
またヒントつかんで帰る女ぐせ 保美
女ぐせ金の工面もうまい也 生々庵
女ぐせ直ると元氣まるでなし 一十
女ぐせ妻もはめてる腕のさえ 生々庵
女ぐせ独身主義を押し通し 薫風子
女ぐせの悪い養子でよく稼ぎ 梅里
女ぐせ悪い男で議員章 摩太郎
女ぐせ酒は酔わぬいほどに飲み 晃

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

ずば抜けた頭孤独の日を送る 恒明
セツとした頭に枕落ちつかず 静馬
頭ごなしに言えは自由の人権の 文秋
女とは頭の格好見せず老い 一三夫
一つよりないのに頭切りかえろ 生薑
頭付き鯛と鯛は一寸違い 喜仙
あふれる苦情を上手に聞き流し 洋敏
誤字当字綴って愛情満ちあふれ 宗義
まあまあを云う努力にコネ動く 圭井堂
履歴書をあずかるだけのコネになり 柳志
おだてられかゝり出されて又落ちる 良
ライバルが去って気力の抜けた窓 あいき
競争のきびしさ生命あるかぎり 一米
満員の汽車もチップで席があり 双楽
踊らせて弾かせてチップ出しおしめ 梅里
仲居部屋チップのことでもめている 清子
旅馴れたチップは頃合いよく出され 柳宏子
下足番チップのだけを磨き上げ 東天紅
チップ出し損このうて逃げるように去に 白柳
無造作にチップは帯へはさまれる 小松園
落選の上を違反で検査され 専翁

柳玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

エゲツナイとこゝろでかたづけ 清子

夜嵐が夫婦の仲をとりしずめ 一舟
泣きどころよく知っている不孝者 スエ
台風が家の泣きどころ知っていた 城東
泣きどころ見せぬ女で御し難く 柳宏子
泣きどころ見せぬ女で御し難く あいき
モデルより描いてる自分が恥しく 清
モデルより描いてる自分が恥しく 風仙洞
しやなりやなりと今年のモード動き出し 光女
へとへとにモデルマンマのまににされ 句念坊
ご近所をモデルにドラマ出来上り 珠笑
波と撮るモデル二月に着る水着 六竜子
どこへ出しても着るモデルだりの帯よ 天真
残酷な夢で冷たい汗にぬれ 寿美司
クロイドの傷あと胸に千羽鶴 豊子
残酷を心安げに事故係 美彌子
残酷な記事を抜き読みしてきかせ はるえ
花見酒晴衣をぬらす俄雨 政子
残酷な春とはなりぬ不合格 一米
モルモット残酷族に養なわれ 文秋
死なすより活かそうとする残酷さ 八郎
終点があべこべそれが終電車 天樹
共喰いで美声になったキリギリス 眉水
俺に歸云えと言うのは残酷さ 白柳

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

海峡の鉄飯微熱の空に何か企む 枯粒
一等船に麻葉のボスが居る海峡 白扇
海峡に昔の豊果つづられる 美佐植

老衰のきざし人魚とおよぐ夢 紫蘭
先ずネギに物価騰貴の兆しあり 鳥雀
人前で叱る言葉は別に持ち 紅寿
胃の線から温情の物語り あきら
温情のうどんに湯気の向うを見 司郎
冷汗をかくポケットは小銭だけ 尚平
冷汗の中で頂くものいただいて ゆきら
記憶の底の冷汗がよみがえる 磯
スト決行花見団子は売れ残り 紅葉
恨みでも有るよう団子にかかりつき 句楽坊
土団子世の醜さをまだ知らず 一窓

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

人情は紙より薄く見括びられ 平八郎
文豪が生れて紙の価を高め あき坊

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ西紙

大阪府東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社



落魄へ紙より薄い世の情 浅太
 所望され色紙出されてよわつる 紅溪
 紙障子一目で分る子 沢山 カロ女
 手紙には金持つて帰れと書いてなし 万里歩
 新聞を只楽しみに今日も生き 紅茶
 道傍の紙屑世相を嘆かせる 笑有
 パーティの後の紙皿哀れなる 須磨子
 紙袋浪費したのをよくたたみ 静紀
 卒業証紙一枚で箔がつき 柳葉
 紙に以た吾が存在の痛々し 峯園
 手筆の母なつかしき包紙 拝山
 古新聞でも無駄にしまった父母 泉水
 御無沙汰の手紙へ嘘も少しませ 内海
 一片の紙で信者を迷わせる 美潮
 久々の手紙途方もない無心 快夢起
 紙箱で運ぶ荷物は嵩が知れ 摩花麗
 愛人の便り紙まで嗅いで見る 曉舟

川維 木次支部句会 (鳥根県)

藤井明朗報

平仮名がきれいな子^なの便り 祥月
 二次会の用意幹事の腕を見せ 利徳
 用意して待てど縁談来通りし 和幸
 雪解けにゴムの捨て場が暴露され 勇
 雪解けて又騒音の街になり 昌
 子の便り囲み都会の噂する 明朗

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

傷心の靴がつくしを踏みにじり 伊久野
 土筆つむ園見のカバン 右左 芳月
 田の中に生えて土筆も邪魔がられ あやめ
 アベックの尻にしかれて土筆折れ 一声
 冬眠の村を土筆がゆりおこし 胡風
 土筆つむ声のだんだん遠くなり 真奇
 アベックに摘まれて土筆汽車にのり 良江
 生返事針のみみどが通らない 宗義
 酔うたのに花を持たせる生返事 浄美
 気にかかる好きなお方の生返事 のぶ子
 生返事刑事するどくきばをむき 竜泉
 生返事外には春の風が吹き 久米雄
 官判押して課長の生返事 秋月
 生返事頼りにならぬことと知り 照路
 散髪屋終業近く生返事 幸仙
 生返事甘い声にもとり合わず 東岸
 年に二度うそは四月と大晦日 三六

川維 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報

大掃除床板のこし昼食^{ひるめし}にする 羊蔵
 床を掃く手も軽やかにいえ始め ます子
 床下で空果鼓動がまた止まず 弘道
 光る床可愛い足跡良く目立ち 玲子
 重役がみがいた床に又滑り 隆蔵
 床下に追いつめられた指名犯 山峰
 床板へ主婦の気性が良くうつり 実男
 床踏んで見て引越はは安心し 生薑
 叱られて娘涙を床に拭き てる子

コン泥へ床が大きな音で鳴り 東村
 床板を張れば新居も出来上り 万年青
 床板をハラハラさせる子の相撲 南風
 音立てぬように面接床を踏み 豊年
 反抗期意見を床へ踏み鳴らす 浪夫
 床下の一円玉ははつとかれ 佐吉
 お二階の床から粗相のお茶がもれ 実男
 床の上浸水女うちよろ騒ぐだけ 六花

川維 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

洞窟に夫婦の名前書き残し 照路
 洞窟で話せば吾声まで変り 一声
 洞窟へはいり童話を思い出し 佐加恵
 洞窟で知らない人に手をひかれ 水仙
 洞窟を神秘なものにさせる注連 仙坊
 洞窟を出て青空へ背伸びする 哲郎
 洞窟の由來は知らぬまま 祀り 宗義
 洞窟の中堂々と腕を組み 三平
 チビでよかったはら穴をくぐり抜け 芳月
 洞窟の何か出そうで何も出ず 素身郎
 洞窟の中で女に寄り添われ 胡風
 こうもりがわが洞窟へ帰って来 美舟
 洞窟の中をくしやみがかけ回り 秋月
 洞窟を天の岩戸の顔で出る 東岸
 洞窟へああ人生は短かすぎ 久米雄

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

卒業へ多感な教師一人泣き 車桑齊
 失敗は問わず若さに期待され 一保
 失敗を私の意地が承知せず 節枝
 失敗へやけ酒飲んで身を落し 忠之
 失敗をして人生の裏を知り 無閑
 失敗を笑い話にできる今 まさよ
 焼香をしてるにくしやみ出してしまい 雄々
 お目出たい入試の話まだつづき 吾柳
 進学と入学それから満が出来 詩郎
 ツイストで鍛えた足で蹴飛ばされ 布堂
 朝のお茶一杯今日の無事祈る 祥月
 卯代せつせと貯めて子の学資 一男
 葬式を出すに勿体ない天気 昭夫
 張合う気起らず素足の膝を組む みどり

川維 大鉄支部みなと句会 (神戸市)

植村客遊子報

やけくそでたけは買手手^{かて}を上げる 初甫
 明石鯛地元のものも縁とおく 賀人
 やけくそで石蹴れば石生きて居た 好松
 大臣は夢の懸橋軽くいう たゞし
 やけくそになった心を子にむける 惣太郎
 招待券で一寸さわりを覗いて来 万の
 子に夢をたくし国立受験さす気 紅月
 街角に夢みなこわれ伴つ女 朝氣
 湯の街で情のあつい妓に出合い 秀笑
 うますぎる話やっぱり夢だった 美由起
 少年の恋の熱さ吹雪いてき 水客
 招待の客席もったいなくながめ 客遊子

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

切札に出した恋の手紙らし 句念坊
切り札も使われすぎて不感症 みなつき

昔気質月賦のものに手は出さず 宏子

運賃が高いと言わぬ連休日 正堂

同じ運賃立たされつめで御通勤 貴山

運賃の値上げに葉書で用をたし 和郎

運賃の値上げへサービス訓辞され 武助

乗車前令は三つと教えたが 八郎

ここからは高くなるのでバスを降り 圭水

ホステスの運賃代も背負わされ 摩天郎

運賃は同じで座席二倍占め 路郎

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

母親がまず気疲れの子の入試 草右

強引な議論に幹部気が疲れ 愛論

気疲れに肝心の用云い忘れ 敏行

ガラタイターホコラスとして一つ持ち 宏子

ガスタイターガスが切れたとも知らず 竹莊

妻知らず高くついている ガスタイター まさこ

再三の見合へ自信板に付き 竹志

自信過剰鏡の顔にも笑を見せ かおり

自信も崩れて女目をつむり 竹青

合格へ新たに子等は自信持ち 八十子

控え目な自信をぐるりあぶなり 没食子

自信満々が今年も浪人し 春雄
自信過剰またあげ足をとられて 落児

ころよい寝息自信の試験前 風仙洞
誤診して自信無くした村の女医 幸男
自信なくせに東大ばかりうけ 路郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

愛情のぬくみにしみとおる 宋一郎

はのぼのと妻の愛情ボナナス日 美代

左前になって愛情逃げてゆき 静林庵

エプロンを旗で埋めて美智子さま 思案坊

紋服のままエプロンでお茶を入れ 吉太郎

エプロンをぬげば乳房をさぐりに来 花梢

夜着のすそおさえてかえる見舞客 太郎

見舞客見舞の品でもてなされ 周一

病状気遣い貸主から見舞 雄声

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

開通へ切符も派手な姿して 好祐

運のない夫へ内職の指が荒れ 雅堂

女運まあく女房で良い所 一男

又とない運と仲人押しまくる 辰始

運の尽き婦警のお尻撫でちまい 九紫

ターミナルビル一枚の人だから 雄水

さめざめとショツタの後をすく泣き 京一樓

衝突の事故酔眼へ大ショツク 白水

ショツクくもうエンストが起りそう 繁三

陽炎へ浮きがゆれてる午下り 一平

どんぐり川柳会 (羽曳野市)

古川静波報

哀愁はなし病窓に桜散る ふじ子

ポケットの中でハンカチ年を越し 史好
ハンカチの白さ二号にない内助 万竿
ハンカチもシートに変わるランドプー 六双庵
振っていたハンカチ何か語るよう よしを

ハンカチが飛ぶようにゆく俄雨 のぶこ

熱弁の余りハンカチにぎりしめ 浪路

ハンカチのサインへかすかにある未練 凡子

ハンカチを窓にはつてるといワイフ のぐさ

静かなる抵抗ハンカチ裂いていき 弥生

持ったかと言われハンカチ又忘れ かをる

ハンカチをもみくちやにして恋たのし 八重子

好意もつ人のハンカチそうと洗い アキコ

ハンカチで見送る姿も新世帯 小桜

ハンカチも男が振ればただの布 静波

ハンカチを握り捻じって言い出せず しげる

そのまんま返すにハンカチこれすぎ ひろし

ハンカチで鼠作って待たされる 紀太呂

愛の告白ハンカチ固くにぎりしめ のん子

川柳明和研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

酒強くなって出稼から戻り 夢虹

やけ酒というが泰然と飲んでいる 民子

酒に勝つ愛を女は信じきり 新子

夜のグラスに酌ぐ銀座女豹なり 舟遊

酒飲むでなく女へ通い 牧人

酒徒あまた李白の気概すてに 蕉風子

酒は静かにのむべかりひみり酌む 葉平

ステレオの横で健康的に飲み 菊風
今宵楽しムに浸るジンフイズ すゝむ

柳箋

本誌への投句はなるべく柳箋をお用いください。選者が選句されるのに整理上助かると云っておられます。

一冊(五〇枚綴)三〇円

送費一冊事に二〇円

川柳雑誌社サービス部

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭

鮎の店

串の店

阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(七七)三九三五番
アベノ橋近地下食通街
TEL(七七)〇一四七番
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL(三三)九一八四番

ガムそつと吐き讃美歌の貌となり 言也
欲を出し疲れた顔で競馬場 行人
河鹿きく窓の女へカメラアイ 生薑
蚊くすべの煙が逃げる小さき窓 正祐
貧しくも吾待つ春の窓あかり 曙蝶
往年の敵へ一票加勢する 梅志
ノキンブちびり苔を添えてあり 三舟
西芳寺苔青々と梅雨の晴れ 六童子
枯山水岩間に咲いた苔の花 大丘子



柳樽室

路郎生

★どうしたらいい句が作れるかと作家の皆さんが、やんでいられるように、編集局では、どうしたらいい雑誌が作れるかに絶えずなやんでいる。私たちは敢えて豪華な柳誌が作りたいとは思っていないが紙とインキのムダ使いだけはしたくないので、蒸し暑い毎日を机にかじりついている。

★幸い前号も好評だったのでヤレと思っている。いい柳誌を出すには第一は句である。真珠のような句ばかりを集めた上に、真摯な研究物やすばらしい随筆などをプラス出来れば申し分ないが、毎号それをのぞむことはなかなか至難なことである。★至難だからと云って、固くなったり、だらしなくなったりでは始末が悪い、やはり地味なやり方を基礎に、時々軽い読物で寛ろいでもらうのがいいのではないかと思っている★約八年間編集局で働いてくれた不二田一三夫君が、ラジオやテレビ方面にその手腕を買われ、その道一

筋にバック進することになったので、前号限り編集局と袂を分つこととなった。本誌としては君を手放すことはマイナスには違いないが、私個人としては多年の労に酬いることの難なかつただけに、君の前途が多幸ならんことを切に祈って別れることにしたのである。

★本号へ河野春三氏が「有情の三つの潮流」を寄せられ、薫風子君の処女句集「有情」をつぶさに鑑賞し、批判し、薫風子の前途に大

募る広告見舞中夏歓交人柳

川柳雑誌社

八月号へあなた

の暑中見舞広告を

★一口金三百円。幾

口でも申し込んで

ください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はお

まかせ願います。

★一口分は五分の一

段組三行

★原稿締切は七月五日着便

★広告料は前金のこと（郵券代用でも

よろしい）

に期待をかけられた実に親切な一文であることをよろこぶもので

ある。本稿は薫風子君だけでなく、後身の多くの人々に味読してもらいたいと思う。

★川柳改題問題も、ローカル柳誌で、ブスブスくすぼっているに過ぎないようだ。反対をハッキリと表明している柳誌すらある。全然問題にしない柳誌もある。先日、柳樽室を訪れた石原青竜刀氏は改題問題には相手にならないと云っていた。彼はどこまでも「諷詩」で行くと云っていた。それに川柳の改題ということ、「諷詩」ということ的主張とは意味が違うとも云っていた。私はそれでいいと思っている。私は本誌の三月号で、改題問題に触れておいたが、毎日新聞から依頼があったので重ねて、そのことに触れた。同紙の「茶の間」欄に掲載されたので関心を持つ人々は読んで呉れたことと思う。

★広告部が恒例の柳人交歓暑中見舞広告を募集しているのでご協力をお願いしたい。値上げは心苦しいが印刷代其他が昂騰しているの世間並みにやっているとるなあぐらに考えていただきたい。

★社の黒板

▼川柳高知支部は高知市帯屋町二ノ八二大西方へ移転した。▼多年編集局にあって活動を続けて来た不二田一三夫氏が五月一日、氏の希望によって編集部員を解かれた。

新刊紹介

前田勇氏（大阪学芸大教授）は昭和三八年四月二十日に東京都新宿区市谷船河原町六教育図書株式会社から国語シリーズ57「文章表現の問題」を市川孝、金岡孝、大石初太郎、前田勇の四氏著で刊行された。前田氏の題目は「文章表現の問題点」一言との関係において一であって本誌副主幹北川春葉氏が一九六〇年秋、大阪市民川柳大会で講演した「現代大阪弁の喜劇性」を引用されたもの、柳人諸氏の一説を薦める。定価九三円。

☆川柳支部会——六月

☆玉造句会・8日（土）六時半、

二百米鳴尾公民館。

麻生路郎著

好評噴々



川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがって、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西成四丁目二五番地
電話大阪（六）七二一六〇一八
振替口座 大阪 七五〇五〇

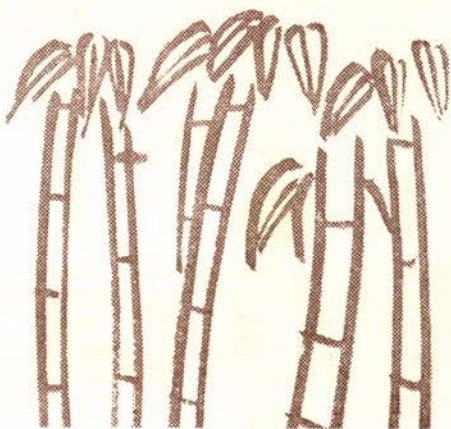


大和文華館

日本建築の特色に近代美をいかした建物で
絵画・彫刻・書蹟・陶磁・漆工・染織など
国宝や 重要文化財をふくむ逸品を集めた
すばらしい美術館です

大阪上本町から奈良ゆき
急行28分 京都から奈良
ゆき特急30分西大寺駅の
りかえ5分 学園前駅すぐ

近鉄



川柳

親ごころ子心

若本多久志著 麻生路郎選

価 150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を
詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である
登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に
深いものであるかを知ることの出来る実に有意義な書である。

東野大八著

風流

人間横丁

価 250円
送費70円

B 6型二五八頁

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者の
ザックパランな人生批判が、その雄筆からほとばし
るさまは凄い。まるで腕の冴えた板前の切れ味にも似
ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載
され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編であ
る。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物
としてお薦めしたい。

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B 6型函入 定価三百八十円 送費九〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがそ
の持論は詩人の民衆的立場を要請した／今は柳界にあ
って庶民の詩人的自覚を促す／ここに川柳雑誌社が詩
る現代川柳批評家として世に送る／凡そ前向作家を自
負する柳俳人必読の書

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

川柳雑誌社

大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

振替口座 大阪 75050
電話大阪 (671) 6081

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

男まさり (十句以内) 西尾 榮選
立読み (十句以内) 田垣 方大選
深読み (十句以内) 木村 十悟選
マイナス (十句以内) 中島 生々庵選
根 雲 (十句以内) 野村 味平選
根 氣 (十句以内) 直原 七面山選
(七月十五日締切)

近作柳樽 (毎号募集)

川柳塔 (毎号十句以内) 麻生路郎選
文 章 (評論・研究・感想其他) 北川 春渠選
(毎月十五日締切)

投稿規定

▼ 投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏
▼ 名雅号を明記する事
▼ 「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募
▼ る。「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
「川柳塔」の投稿は不朽洞会員に限

川柳雑誌

第三十八号 定価 九〇円 (送料六円)

(禁転載)
半力年 五七六円
一力年 一〇八〇円
昭和三十八年五月廿五日 印刷
昭和三十八年六月一日 発行

川柳雑誌社

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
行印刷人 麻生 幸二 郎
編集兼発 行印刷人 麻生 幸二 郎
電話大阪 (671) 6081
振替口座大阪 七五〇五〇

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿八年六月一日 発行 毎月一冊 一日発行

編集 廣田 集
発行 柳 柳

麻生路郎 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西四丁二丁目二番地 電話大阪(671)六〇八一

郵政口津大坂七五〇五番

定価九十円(送料六円)

疲れをとり 抵抗力の強い からだをつくる

高単位総合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

疲労・神経痛・筋肉痛・便秘に 早く強いききめ!

吸収がよく、すぐに生理作用に有効な型となり
強い力を発揮します。のむ時も、のんだ後でも
いやなニオイはありません。

●無臭・持続性の新活性型ビタミン

ビオタニン

(5mg錠・25mg錠)各30入 100入 300入 他に散



三共株式会社

イ-8

麻生路郎先生著

川柳とは何か

―川柳の作り方と味わい方―

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽―そうしたもろ
もろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的である。その川柳がいかんして発生し、
経過し、今日に至り、将来に動くか、しか
もその作り方は、味わい方は―以上を最
も明快にわかりやすく、斯界の第一人者た
る著者が答えているのが本書である。

取次所

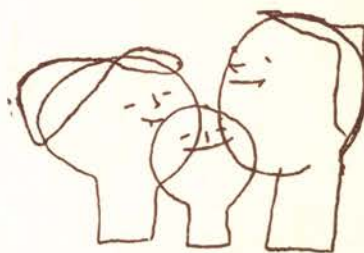
川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

価
二五〇円
送
七〇円
費

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2